2011年　まほろば会秋の見学旅行予定表

晩秋の出羽路（山形四都物語）

日程　平成23年11月11日（金）～13日（日）

集合　ＪＲ東日本　大宮駅　8時15分　南改札口前

8時34分発　つばさ127号に乗車　（10時23分　米沢駅着）

解散　ＪＲ東日本　仙台駅　15時頃

13時36分　山形駅発　→ 14時56分　仙台駅着

見学予定先

	見学場所	住所	電話番号
11/11	米沢市上杉博物館	米沢市丸の内1-2-1	0238-26-8001
	上杉神社	米沢市丸の内1-4-13	0238-22-3189
	松岬神社	米沢市丸の内1-3-60	0238-22-3189
	（昼食）　吉亭	米沢市門東町1-3-46	0238-23-1128
	上杉家御廟	米沢市御廟1-5-30	0238-23-3115
	旧高畠駅跡（高畠広場）	東置賜郡高畠町高畠1568-2	
	うきたむ風土記の丘考古資料館	東置賜郡高畠町安久津2117	0238-52-2585
	日向洞窟遺跡	東置賜郡高畠町	
	稲荷森古墳	南陽市長岡1175	
宿泊	**・はまあかり潮音閣**	**鶴岡市湯野浜1-26-4**	**0235-75-2134**
11/12	城輪柵跡	酒田市城輪地内（本楯地区）	
	酒田市立資料館	酒田市一番町8-16	0234-24-6544
	本間家旧本邸	酒田市二番町12－13	0234-22-3562
	旧鐙屋	酒田市中町1-14-20	0234-22-5001
	山居倉庫（庄内米資料館）	酒田市山居町1-1-8	0234-22-1223
	（昼食）　食彩旬味　芳香亭	酒田市山居町1-1-20	0234-21-1036
	致道博物館	鶴岡市家中新町10-18	0235-22-1199
	藤沢周平記念館	鶴岡市馬場町4-6	0235-29-1880
	庄内藩校・致道館	鶴岡市馬場町11-45	0235-23-4672
	旧風間家住宅　「丙申堂」	鶴岡市馬場町1-17	0235-22-0015
	羽黒山神社（五重塔・三神合祭殿）	鶴岡市羽黒町手向	0235-62-2355
宿泊	**・ヒルズサンピア山形**	**山形市蔵王飯田637**	**023-631-1555**
11/13	立石寺（山寺）	山形市山寺4456-1	023-695-2843
	山寺芭蕉記念館	山形市山寺字南院4223	023-695-2221
	山形県郷土館　文翔館	山形市旅篭町3-4-51	023-635-5500
	最上義光歴史館	山形市大手町1-53	023-625-7101
	山形市郷土館（旧済生館）	山形市霞城1-1	023-644-0253
	山形県立博物館	山形市霞城町1-8（霞城公園内）	023-645-1111
	（昼食）　駅弁を車内で食す		

平成23年11月吉日

秋の見学旅行　参加者　　各位

まほろば会　幹事

秋の見学旅行の資料送付について

朝晩の冷え込みも厳しくなって参りましたが、皆様お変わりありませんでしょうか。
お申し込みいただきました、秋の見学旅行も間近に迫ってまいりました。
ご案内が遅くなりましたが、秋の見学旅行の資料をお送りします。

１１月の山形の気候は、山形市で最低気温の平均は２．９℃、最高気温の平均は１２℃と東京と比較してもかなり低い気温です。山形の１１月は、厚手のジャケットやコートが必要で、マフラーや手袋が必要な日もあるとのことです。寒さの対策をお願いいたします。
また、今回の見学旅行では、羽黒山神社・山寺等石段を歩いていただくことが多く、歩きやすく・滑べりにくい靴でご参加いただきますよう宜しくお願いいたします。

（お詫び）

なお、当初参加費用につきましては４万円程度とご案内させていただきましたが、参加人数が当初想定していた人数（２５名）に達しなくなったため、ご案内させていただいた金額を超過することとなってしまいました。
誠に申訳ありませんが、今回の見学旅行の費用として５万円をお預かりさせていただきたいと思います。差額が生じた場合には、通例に従い、別途還元させていただきますので何卒ご了解いただきますようよろしくお願い致します。
また、参加費用につきましては、同封させていただいた払込取扱票にてお振込みいただくか、当日幹事にお渡しいただければと存じます。

今回の秋の旅行が充実した旅行となりますよう、幹事一同全力を尽くしたいと思いますので、宜しくお願い致します。

2011年　まほろば会秋の見学旅行資料

晩秋の出羽路（山形四都物語）

平成２３年１１月１１日（金）～１３日（日）

山形県（やまがたけん）は、日本の東北地方南西部の県。日本海に面する。県庁所在地は山形市。

山形県の名前の由来

山形県の「山形」は、「山の近くの土地という意味」であり、平安初期の資料「和名類聚抄(わみょうるいじゅうしょう)」に今の山形市の南側を「山方(やまがた)郷」と言ったことに由来があると言われている。なぜここを山方と言ったかは不明であるが、今の山形市より見て南のほうには、山岳信仰で知られた蔵王、瀧山(りゅうざん)の山々があるのが関係しているのではないかとも考えられている。
その後この山方という地名は、資料から見えなくなるが、南北朝時代に斯波兼頼が政治の拠点をこの地に置き政治が安定してくると、土地売買の文書などに山形という地名が改めて見えてくるようになった。

山形県は、東北地方の日本海側に位置し、東京から概ね北に300km、山形新幹線で約3時間の距離にあり、一般には、全国生産量の7割を占める「さくらんぼ」と鮮やかな四季で知られている。
蔵王、月山、鳥海、吾妻、飯豊、朝日と日本百名山に数えられる秀麗な山々に囲まれ、南から連なる米沢、山形、新庄の各盆地と庄内平野を「母なる川」、最上川が流れる、美しい自然に恵まれた地域である。
江戸時代、俳聖・松尾芭蕉は「奥の細道」の全行程156日のほぼ三分の一にあたる43日間を山形県で過ごし、その旅は出羽三山を目指した「心の旅」とも言われるように、古の昔から、山形県は精神文化の地と崇められてきた。
全国第9位の93万haの県土面積は、その地勢や江戸時代の幕藩体制のなごりから、方言や食べ物など、文化も少しずつ異なり、南から、置賜、村山、最上、庄内の4つの地域に大きく区分されている。

山形県の気候

山形県の気候は、隣県の新潟県や秋田県と同様に県内全域が日本海側気候であり、一部例外もあるが隣県の秋田県と同様に県全域のおよそ９０%の地域が特別豪雪地帯である。日本海に面する庄内地方が夏冬ともに県内では最も気温が高く、年間平均気温も北関東や東京都の西部内陸部とあまり変わらないほどで、緯度の割に温暖であるかがわかる。夏は熱帯夜になるほど蒸し暑い一方、冬は温暖だが、日照時間がほとんどない。気温が高いために雪は降っても解けやすく、積雪量はそれほど多くは無いが、鶴岡市などでは突発的に豪雪となる年もある。一方、内陸側は内陸性気候で寒暖の差が激しく、置賜地方などでは－15度近くまで下がることも珍しくない。夏は非常に暑いが比較的乾燥しており、朝晩は涼しくなり、熱帯夜も庄内地方と比べると少ない。春季から夏季にかけてはフェーン現象が発生しやすく、突発的に猛暑日に見舞われることも決して少なくない。1933年（昭和8年）7月25日に山形市で観測された気温40.8度は、2007年（平成19年）8月16日に埼玉県熊谷市、岐阜県多治見市で観測された気温40.9度に抜かれるまで、74年間にわたって日本最高の記録であった。

山形（山形市）の気候

月別	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
平均最高気温（℃）	3	3.5	7.9	15.9	21.8	25	28.4	30.2	24.8	18.6	12	6.2
平均最低気温（℃）	-3.6	-3.7	-1.1	4.2	9.7	15	19.1	20.3	15.7	8.7	2.9	-1
降水量（mm）	75.4	70.2	66.5	68.1	81.3	103	144	149	134	76	80.8	77.2

東京の気候（参考）

月別	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
平均最高気温（℃）	9.8	10	12.9	18.4	22.7	25.2	29	30.8	26.8	21.6	16.7	12.3
平均最低気温（℃）	2.1	2.4	5.1	10.5	15.1	18.9	22.5	24.2	20.7	15	9.5	4.6
降水量（mm）	48.6	60.2	115	130	128	165	162	155	209	163	92.5	39.6

山形県の概要

自治体	推計人口	国勢調査人口	県内順位	全国順位	面積	県内順位	全国順位	人口密度	県内順位	全国順位	施行日
山形県	1,179,964	1,216,181		34	9,323.46		9	126.56		42	
山形市	254,636	256,012	1	90	381.34	4	203	667.74	1		1889.4.1
米沢市	90,258	93,178	4	298	548.74	3	122	164.48	12		1889.4.1
鶴岡市	137,825	142,384	2	182	1,311.51	1	7	105.09	18		1924.10.1
酒田市	112,702	117,577	3	238	602.79	2	104	186.97	10		1933.4.1
南陽市	34,126	35,190	10	676	160.7	24	411	212.36	9		1967.4.1
高畠町	25,242	26,026	13	106	180.04	21	250	140.2	14		

南陽市の全国順位は町制をひいている自治体内の順位。

.口は2009年10月1日の推計人口による。人口(国勢調査)は2005年10月1日の国勢調査による

山形県の歴史

【原始】

今から約3万年前頃（後期旧石器時代）に大型哺乳動物（ナウマンゾウ、オオツノシカ、ヘラジカなど）を狩猟する人々が山形に現れた。その時代の遺跡として最上川（真木遺跡朝日町）や荒川（荒川遺跡小国町）・赤川などの主要河川やその支流（明神山遺跡寒河江町寒河江川）の河岸段丘上に100カ所以上見つかっている。それらの遺跡からは、槍先に使う斜軸尖頭器や木の枝や骨に溝を付けそこに埋め込み利器とした石刃などの狩猟用道具が多く発見されている。

また、県内一円に縄文時代の遺跡が確認されている。今でも日本一のブナ林を有するが、当時は平地も豊かな食料をもたらす落葉広葉樹林におおわれていたものと思われる。日向洞窟遺跡(高畠町)の1万年前の地層からは東北日本最古の土器の一つが、また、西の前遺跡(舟形町)からは高さ45cmの国内最大級の土偶「縄文のビーナス」が出土している。

このあと、稲作を中心とした弥生文化が伝わるが、全長96mの稲荷森古墳(南陽市)など、大型の前方後円墳については、本県南部と宮城県南部を結ぶ線が北限とされている。

【古代(飛鳥・奈良・平安)】

奈良に平城京が開かれた二年後の和銅5年(712年)9月に、越後国(新潟)から出羽郡を割いて、出羽国が建国された。その四年後、陸奥国から最上(現在の村山、最上)、置賜の二郡が出羽国に編入。当初の出羽国はほぼ山形県の範囲で成立し、だんだんその領域を北へ、秋田県側に伸ばしていった。酒田市の城輪柵(きのわのさく)遺跡は、この頃の国府と考えられています。

この時代、修験の山－出羽三山(鶴岡市)、「めでた、めでたの若松さま」と花笠音頭にも唄われる若松寺(じゃくしょうじ：天童市)、山寺として全国に知られる立石寺(りっしゃくじ：山形市)や秘仏の宝庫、慈恩寺(じおんじ：寒河江市)など、今に伝わる古刹も開かれている。

飛鳥から平安時代にかけては、奈良や京都といった中央の権力に山形県が組み込まれていくときでしたが、平安末期の山形県は奥州藤原氏の影響下にあったものと見られ、義経伝説が庄内、最上地域に多く残されている。

【中世(鎌倉・室町・戦国)】

鎌倉時代に入ると、奥州藤原氏攻めに功績のあった関東武士団が県内各地の地頭に任命された。こうした村山、置賜地域の大江氏(寒河江氏、長井氏)、庄内地域の武藤氏(大宝寺氏)などは、初めは代官を置いて統治していたが、次第に県内に定着するようになり、苗字に地名を掲げるなどして地方領主となっていった。

室町時代の南北朝の混乱期、宮城県北部に本拠を置く奥州管領の斯波氏は延文元年(1356年)に斯波兼頼を羽州管領として山形に派遣した。斯波氏は当時最上と呼ばれていた山形を本拠としたので、苗字も最上氏と改め支配を広げていき、戦国期には最上義光が出て、村山地域から、最上、庄内地域へと北方に勢力を拡大していった。

一方、福島県北部が基盤の伊達氏は宮城県南部を経由して置賜地域に進出し、戦国期にはその本拠を置賜地域に移します。永禄10年(1567年)米沢城に生まれた、独眼竜の異名を持つ伊達政宗の代になると、置賜地域、宮城県南部、浜通りを除く福島県を版図とする南奥州最大の大名となるが、豊臣秀吉の命により宮城県にお国替えとなった。

【近世(江戸)】

天下分け目の関が原の戦いを受けて、慶長6年(1601年)、置賜地域には、敗れた西軍方の上杉景勝が会津から移され、執政の直江兼続とともに領国経営にあたった。

置賜地域を除く山形県は、東軍(徳川)方についた功績により、秋田県南部と併せ57万石の大大名となった最上義光の所領となるが、元和8年(1622年)に最上氏が改易されると、旧最上氏領は幕府に近い譜代大名等と府直轄領(天領)に分割されることとなる。こうして、庄内には酒井氏、新庄には戸沢氏が入り幕末まで藩政を布くこととなるが、山形には鳥居氏が封じられるも統治は長く続かず、幕末まで領主が13回交代した。また、山形周辺の村山地域の大部分は北日本一の広さと言われる天領となりました。

天領からの米の積み出しや「最上紅花」などの特産品で最上川舟運は盛んになり、西廻り航路の開設により酒田湊は日本海随一の活況を見せるようになる。国内有数の商都となった酒田には、日本一の大地主、本間家が生まれ、三代目の本間光丘は庄内砂丘の植林にも努め、公益の人として賞賛されます。また、米沢藩では九代藩主上杉鷹山が疲弊しきった藩財政の立て直しを進め名君と尊敬を集めた。

【近現代(明治・大正・昭和・平成)】

行政区域に注目すると、県内の藩は、明治4年(1871年)の廃藩置県により7県(山形、米沢、上山、天童、新庄、大泉、松嶺)に置き換えられるが、その後の統廃合により、明治9年(1876年)8月21日、現在の山形県が誕生する。

市町村の状況では、明治11年には11郡336町1,223村であったものが、明治22年4月に市制・町村制が施行されると、山形、米沢は仙台など全国29の都市とともに初めての市となり、県下は2市、8町(宮内、長井、上山、天童、新庄、酒田、松嶺、鶴岡)、212村となった。

その後、各市町村相互間の廃置分合などがあり、昭和25年10月現在で5市30町188村となっていたたが、いわゆる「昭和の大合併」を経て昭和43年6月1日からは13市27町4村で推移してきた。

平成17年、余目町と立川町が7月に合併して庄内町となり、10月には鶴岡市・藤島町・羽黒町・櫛引町・朝日村・温海町の1市4町1村が「新」鶴岡市に、11月には酒田市・八幡町・松山町・平田町の1市3町が「新」酒田市となり、現在は35市町村(13市19町3村)となっている。

方言

山形県の方言は中央部を縦断する朝日・出羽山地を境に、大きく庄内方言（北奥羽系）と内陸方言（南奥羽系）とに分けられる。内陸方言はさらに最上・村山・置賜の各地方境界にほぼ沿いつつ3区分される。
現在、全国的には主に「山形弁＝山形県の方言」としひとくくりにまとめられて認知されているが、正確には山形県内の方言には上記のように細かくいくつかの種類がある。そのため、地域によってはその地域のみでしか使われていない方言もあり、同じ山形県民同士でも住んでいる地域次第ではほとんど通じないこともある。

発音

発音では、庄内（小国町を含む）・最上地方（舟形町・最上町を除く）に東京式アクセント、最上町に特殊アクセントが分布するが、村山（舟形町を含む）・置賜地方は無アクセントである。また、庄内・最上方言では連母音の融合が盛んだが、村山・置賜方言では目立たないなどの特徴もある。

文法

文法では動詞の命令形が庄内ではレ語尾、内陸ではロ語尾となるほか、推量・意志表現ともに内陸で「オギンベ」を用いるのに対して、庄内では「オギロ」（意志）・「オギンデロ」（推量）となり対立する。また、庄内・最上方言では形容詞は無活用に近い。

他県の方言との関連性

庄内方言は新潟県・秋田県との共通性をもち、上方語の影響も目立つのに対して、内陸方言は宮城県・福島県との関連性が高い。その中でも村山方言は小藩が幾分にも分立した歴史背景もあり、さらに複雑な分布形態を示す語が多い。

方言にまつわる逸話

①の読み方

標準語では①は「まるいち」、（1）は「かっこいち」と読むが、山形では①を「いちまる」②を「にまる」と読み、（1）を「いちかっこ」（2）を「にかっこ」と読むなど、中の数字を先に読むのが一般的である。これは方言の一種と思われるが、同じ東北地方でも他県では「まるいち」であり、「いちまる」と読むのは山形県のみである。学校や企業でも「いちまる」と読まれるなどあまりにも強く一般的に定着しているため、山形独自の「方言」であることを知らずに県外へ出た人が①を当たり前のように「いちまる」と読んでしまい他県出身の人から不思議がられるということがしばしば起きている。

その他

A組を「えーくみ」、7時を「ななじ」、3階を「さんかい」と読む。
「こわい」＝疲れた、「マンマ」＝ご飯、「あいべ」＝行こう（Let's go）、「投げる」＝捨てる、という意味で用いることがある。
日本一短い会話がある。「け（食べなさい）」「く（食べます）」「こ（食べましょう）」がそれであり、これを使った日清食品の地方 CM が作られたこともある。
山形弁（特に村山弁）には敬語がないが、語尾に「ッス」、「ッシ」をつけることで全ての言葉が丁寧な表現になる。例えば「んだね」（そうだね）を丁寧にすると「んだねっす」（そうですね）となる。同様に「－してけろ」（－してくれ）は「－してけろっす」（－してください）となる。促音は話者によってしばしば聞き取れないほどに短くなるため、「んだねす」「してけろす」と聞こえることも多い。

◎統計データで見るやまがたの日本一

主な項目	山形県の数値	全国の数値
一般世帯の平均人員	3.09人	2.55人
三世代同居率	24.90%	8.60%
女性就業率（25～39歳）	74.60%	60.60%
65歳以上の親族のいる世帯割合(対一般世帯数)	51.66%	35.07%
着工新設持ち家住宅の床面積(1住宅当たり)	152.3m2	130.2m2
自動車保有数量(千世帯当たり)	2,118台	1,414台

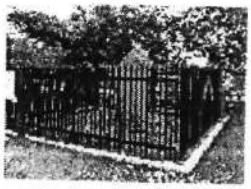
＜参考＞総務省「家計調査」の都道府県庁所在市の比較で山形市が日本一の項目

項目	山形市の数値	全国の数値
年間1世帯当たりの中華そば（外食）の支出金額	13,724円	5,679円
年間1世帯当たりのさといもの支出金額	2,163円	935円
年間1世帯当たりのコンニャクの支出金額	3,986円	2,203円
年間1世帯当たりの食塩の購入数量	4,413ｇ	2,561ｇ
年間1世帯当たりのしょう油の購入数量	10,819ml	7,220ml

米沢市概要（山形県HP等より）

米沢市は古くから交通の要所で軍事的拠点として置賜地方の中心的存在として城が築かれ城下町として発展してきた。鎌倉時代は米沢市を含む置賜郡一帯は幕府の御家人大江氏の一族が地頭として入り長井氏を名乗り米沢城を築き領国経営を行ったが、時代が下がるにつれ次第に伊達氏の影響力を受け、天授６年（1380）に侵攻され至徳３年（1385）には時の領主だった長井広房が非業の死を遂げると、置賜郡は伊達氏の勢力圏に入ることとなる。その後、戦国時代に行なわれた伊達氏の家督争いだった天文の乱の後、米沢城を本拠地とし城郭の拡充や城下町の整備など行った。伊達政宗の代となり芦名を破るとさらに会津若松城（黒川城）（福島県会津若松市）に居城を移したが天正１９年（1591）豊臣秀吉の奥州仕置きにより岩出山城（宮城県大崎市岩出山）に移封された。米沢には蒲生氏郷の一族である郷安が配され、蒲生氏が宇都宮に移ると上杉氏が支配し米沢城へは直江兼続が入った。関が原の合戦後は西軍側に付いた上杉家は１２０万石から３０万石に減封され本拠地を会津から米沢へ移され米沢藩を立藩、寛文４年（1664）に１５万石に減らされるものの明治維新まで続いた。米沢市の町並みの大きな特徴の１つに米沢市郊外にある芳泉町や石垣町に見られる武家屋敷町が上げられるが、これは大藩だった上杉領が石高が減らされても家臣を抱え込んだ為、米沢城下に収まりきれず郊外に居を構えたもので、そこに住んだ武士達は半士半農の生活を送った。米沢市中心部は都市化が進み、江戸時代の建物や町並みは少なく文化財も明治以降のものが大部分を占めているのに対し、郊外には先程の武家屋敷が散在し、笹野観音堂（米沢市指定文化財）や羽黒神社、成島八幡神社、塩野毘沙門堂など上杉氏縁の寺院が多く当時の町づくりが現在の米沢市の基礎になったといえる。

米沢城



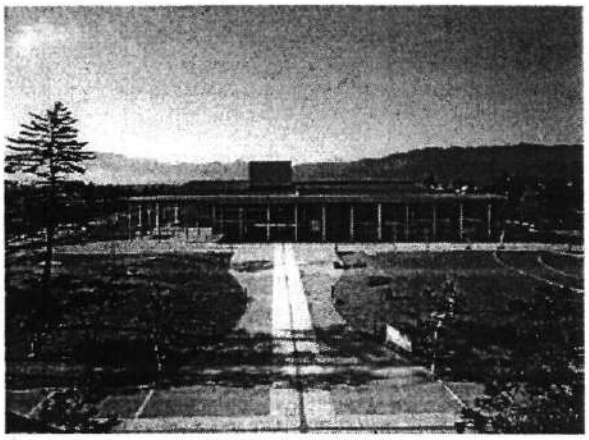
米沢城は置賜郡の地頭職に赴任した長井氏が暦仁元年（1238）に築いたものが最初であるとされる。室町時代初期まで長井氏の支配が続いたが、天授６年（1380）頃から伊達宗遠に攻め立てられ１３８５年に滅亡した。その後は伊達氏の支配下に入り、天正１７年（1589）からは本拠地となる。天正１９年（1591）豊臣秀吉の奥州仕置きにより当時の当主だった伊達政宗は岩出山城（宮城県大崎市岩出山）に移封され、蒲生氏郷の一族である郷安が米沢城を受け取った。蒲生氏が宇都宮に移ると上杉氏が支配し米沢城へは直江兼続が入った。関が原の合戦後は西軍側に付いた上杉景勝は１２０万石から３０万石に減封され本拠地を鶴ヶ城（福島県会津若松市）から米沢へ移された。米沢城の本丸は東西１６８ｍ、南北１４５ｍの広さで、幕府への遠慮からか天守閣は築かれず変わりに三階櫓を二基備え、主要部以外は石垣を使用せず土塁中心の城であった。内部には藩主居館や上杉謙信を祀る堂宇が建立されていた。二の丸には櫓を８基備え米沢新田藩1万石の藩庁や寺院、蔵、御殿などが配されていた。三の丸には上、中級家臣の武家屋敷が並び防御の要となっている。米沢城は明治維新後に廃城となった為、建物の遺構はなく、内堀と土塁の一部が遺構として残るだけである。本丸の大部分が上杉神社の境内となり周囲は公園として整備され、二の丸には松岬神社や旧上杉家伯爵邸などがあり米沢市の観光の中心となっている。

上杉神社

上杉神社の創建は明治９年（1876）に米沢城本丸跡に社殿を建立した事から始まる。藩政時代は祭神である上杉謙信の遺骸を中心に左に善光寺如来尊、右に毘沙門天を安置し真言宗の寺院による仏式で祀られていたが、明治初頭に発令された神仏分離令により、遺骸が上杉家御霊屋に再葬され、御霊は上杉神社の神号が許された。神社創建当初は謙信公と鷹山公の２柱を祀っていましたが、明治３５年に別格官幣社に昇格すると松岬神社を摂社として建立し鷹山公を祀る事で上杉神社は謙信公の１柱となる。大正８年（1919）に火事によって全焼したため、大正１２年に再建された。再建には東京帝国大学工学部教授の伊東忠太が設計し総工費４６万２，５５０円余りというの莫大の費用が掛けられた。平成１０年に上杉神社稽照殿が国登録有形文化財に指定されている。

松岬神社

松岬神社（まつがさきじんじゃ）は、山形県米沢市に鎮座する神社。上杉神社の摂社。
松が岬公園（米沢城の二の丸址）に位置し、上杉氏２代（初代藩主）の景勝、十代で米沢中興の名君鷹山公、鷹山公の師細井平洲、米沢建設の恩人、直江兼続、米沢藩復興の功臣竹俣当綱、莅戸善政の６柱を祭神とする。明治に入ると上杉謙信の祠堂を改めた上杉神社に合祀された米沢藩中興の大名・上杉鷹山は、明治35年（1902年）に上杉神社が別格官幣社に列せられるに際し、米沢城二の丸世子御殿跡に設けた摂社「松岬神社」へ遷されることとなった。大正元年（1912年）9月28日には神殿が造営され、県社に列した。あわせて神餞幣公料供進神社にも指定された。大正12年（1923年）4月に米沢藩二代上杉景勝、また米沢市制施行50周年にあたる昭和13年（1938年）には、景勝の家老である直江兼続、鷹山の師・細井平洲、鷹山の下で活躍した竹俣当綱・莅戸善政を合祀し、現在に至る。



米沢市上杉博物館

は上杉神社に隣接する米沢城二の丸跡地に位置する、複合文化施設。国宝「上杉家文書」「洛中洛外図屏風」をはじめ米沢と上杉家ゆかりの文化財を数多く所蔵しており、「みて・ふれて・たのしむ」をコンセプトに歴史を五感で体験できる常設展示室、多様なジャンルの展覧会を開催する企画展示室のほか、体験学習室や情報ライブラリーを備え、多様な歴史・文化体験が可能となっている。
常設展示室では上杉の歴史と文化を中心とした「江戸時代の置賜・米沢」を主軸に構成されており、企画展示室では、置賜の歴史、上杉文化など歴史や美術に関する企画展や、郷土ゆかりの作家や作品を取上げた展示を行っている。

吉亭

吉亭は大正８年（1919）の米沢大火直後に米沢織織元吉澤邸の屋敷として建てられた建物です。敷地は江戸時代には米沢藩の家老だった甘粕家の屋敷跡で本屋から見える趣のある庭園はその当時のものを継承し「甘粕庭」と呼ばれてい.る。本屋は木造２階建て、寄棟、瓦葺き、門は江戸時代末期に建てられた薬医門形式、本屋と同じく大正８年（１９１９）に建てられた３階建て地下１階の北側土蔵、江戸時代に建てられた土蔵がそれぞれ国登録有形文化財に指定されている。

上杉家御廟所

上杉家廟所とは、山形県米沢市にある米沢藩歴代藩主の墓所である。昭和５９年に国の史跡に指定。史跡の名称は、米沢藩主上杉家墓所という。元和9年（1623年）景勝が他界すると現在の廟所に埋葬され、以後十二代藩主までここに埋葬される。 明治政府の「廃城令」に伴い米沢城は解体され、謙信の霊柩も当地に移ることとなった。現在の廟所は謙信霊廟を中央にして、その左右に歴代藩主の霊廟（墓所）が厳かに立ち並んでいる。二代景勝から八代重定までは、火葬での埋葬が行われ、御堂は入母屋造りの建造物である。さらに九代治憲から十二代斉定までは土葬となり御堂も宝形造りとなっている。治憲の倹約令により、構造も簡略化され材質も落とされている。 藩主ではないが、治憲の実子で十代治広の養嗣子であった顕孝も共に祀られている。また、明治以後に死去した十三代斉憲からは東京に墓所がある。樹齢４００年と言われる杉の木立と相まって静かで神聖な雰囲気を感じさせる。

高畠町概要（山形県HP等より）

高畠町には古社が多く、日本三文殊の１つに数えられる亀岡文殊堂（大聖寺）は大同２年（807）に徳一上人が開山したと伝えられ、貞観２年（860）には安久津磐三郎と呼ばれる豪族が慈覚大師と共に阿久津八幡神社を勧請したと伝わっている。
平安時代末期には樋爪五郎季衡が高畠町一帯を支配したが、鎌倉時代になると御家人だった大江氏の一族が長井氏を名乗り置賜地方を統治することとなる。天授６年（1380）に伊達氏が置賜に侵攻し、時の領主だった長井広房は非業の死を遂げた。伊達氏は高畠城をこの地方での本拠とし、伊達政宗が米沢城から岩出山城（宮城県大崎市岩出山）へ居館を移すまで伊達氏の支配が続いた。
その後は蒲生氏、上杉氏と領主が変わり、寛文４年（1664）に上杉氏が１５万石に石高が減らされると天領となる。明和４年（1767）に織田信浮（織田信長の嫡流）が２万石で高畠藩を立藩するが、織田領は現在の高畠町だけでなく、天童市や福島県の信夫郡などに分散してあった為、領地経営は混乱を極め、飢饉や高幡陣屋の火災なども重なり財政が悪化した。三代藩主だった織田信美は所領の６割を占める天童へ本拠を移す事を幕府に求め、文政１１年（１８２８）に認められ天保元年（１８３０）に天童へ移ることとなった。高畠には代官所を置いて支配したが、その後は天領や米沢藩に属すなど複雑な経緯を辿り、農民も耐えかね一揆が起きるなど不安定な状態で明治維新を迎えた。

うきたむ風土記の丘考古資料館

縄文のタイムカプセル
山形県内唯一の考古資料館として、旧石器時代の上屋地遺跡（飯豊町）出土の石器、縄文時代草創期の日向洞窟（ひなたどうくつ）［国指定史跡］等の土器や石器、縄文時代前期の押出（おんだし）遺跡の彩漆土器・縄文クッキー等［国指定重要文化財］、古墳時代・奈良・飛鳥時代の資料など県内を代表する考古資料を展示している。体験学習として、勾玉・弓矢・あんぎん・ガラス玉つくり、火おこしなどが出来る。５月の連休には「赤ちゃん（２歳未満）手形」も行っており好評を博している。また、周辺は歴史公園として整備されており家族づれでにぎわう。

日向洞窟遺跡

日向洞窟は案内板によると
「日向洞窟は、巨大な凝灰岩塊が露頭する長峰山の麓に所在します。屹立するする凝灰岩は、通称「立石」と呼ばれ、遺跡は、西から第Ⅳ岩陰、第Ⅰ洞窟、第Ⅱ洞窟、第Ⅲ岩陰の４ヶ所の洞窟、岩陰のより構成されています。洞窟が遺跡として認知されたのは昭和２９年のことで、翌３０年には第Ⅰ洞窟の調査が行われました。この調査により出土した土器片が、最古期の縄文土器群として一躍注目され、翌３２年、３３年と継続して調査が行われました。昭和４５年には、高畠町史編纂の一環として再び調査が実施されています。計４回にわたる調査により、たくさんの遺物が出土しましたが、とりわけ最も下の層から出土した隆起線分土器や爪形文土器の土器群や、それに伴う石槍、有舌尖頭器、断面三角形錐、植刃、矢柄研磨機、局部磨製石斧、半月形石器等の一連の石器群は、縄文土器の起源に関する問題に新たな一頁を開くとともに、縄文文化の始源、草創期研究に大きく貢献しました。これらのことをふまえて、昭和５２年２月１７日国指定史跡として指定されました。
その後、昭和６２年から平成元年にかけて、第Ⅰ洞窟から西へ約１５０ｍ離れた地点（西地区）について町教育委員会により調査が行われました。その結果、良好な草創期の遺物を包含層が確認され、膨大な量の土器や石器が出土しました。また、石器を製作するときに生じる剥片や砕片の集中が随所に見られ、石器製作跡の様相を呈していました。この西地区の調査により、遺跡が洞窟外の広範囲に広がりを持つことが明らかとなっています。　高畠町教育委員会」　とある。

旧高畠駅駅舎

高畠線（たかはたせん）は、かつて山形県東置賜郡高畠町の奥羽本線糠ノ目駅（1991年に高畠駅と改称）から分岐して（旧）高畠駅を経由し二井宿駅までを結んでいた、山形交通の鉄道路線である。高畠町周辺で製糸業が発展したため、工業製品の輸送を目的に敷設された。昭和期に入り電化され、第二次世界大戦前には工業製品のほか、木材・乳製品・木炭・果物の輸送も担った。戦後、トラックの発展によりそちらに役目を譲り、1974年（昭和49年）に全廃された。

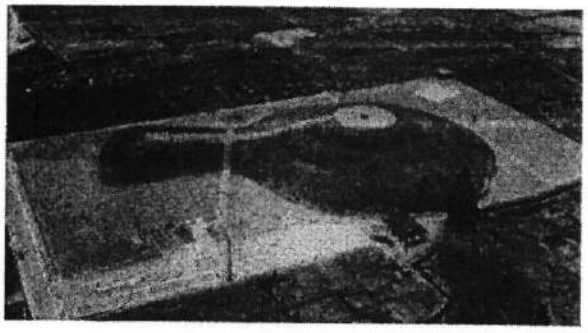
1968年当時の高畠線停車駅一覧
糠ノ目駅 － 一本柳駅 － 竹ノ森駅 － 高畠駅 － 東高畠駅 －
八幡宮前駅 － 蛭沢駅 － 上駄子町駅 － 二井宿駅

まほろば緑道

（旧）高畠駅の駅舎はそのまま保存されており、鉄道廃止後も代替する山交バス高畠待合所として利用されていたが、代替バスは町営になった後廃止された。
電車1両（モハ1）、電気機関車1両（ED1）、貨車1両も保存されており、路線跡はサイクリングロードまほろば緑道となり、置賜自転車道（米沢駅－赤湯駅）の一区間となってい

南陽市概要（山形県HP等より）

南陽市は山形県内でも早くから開けていた地域として知られており、蒲生田山古墳群（南陽市上野）には４世紀に造られたと推定される古墳も発見されている。また、稲荷森古墳（南陽市長岡）は山形県最大級とされる古墳であり、東北の中でも６番目の大きさの古墳である。
鎌倉時代の置賜地方は御家人だった大江氏が長井氏を名乗って統治していたが、時代が下がるにつれ伊達氏の影響力が強まり、戦国時代に入り伊達氏が米沢城を居城とすると南陽市一帯も支配下に置かれ、最上領に接している事からも軍事的にも重要視されることとなった。南陽市には宮沢城を始め二色根館（南陽市指定史跡）、小滝城などが築かれ伊達氏の家臣達が配された。
戦国末期からは上杉領となり宮沢城には尾崎重誉が入り対最上氏に備えた。江戸時代に入り１国１城令が発せられると宮沢城は廃城となるが、この地は日本三熊野と称された熊野大社が控え門前町として引き続き重要視された。赤湯は湯治としてだけでなく米沢街道の宿場町としても人や物資の往来があり栄えていた。



稲荷森古墳

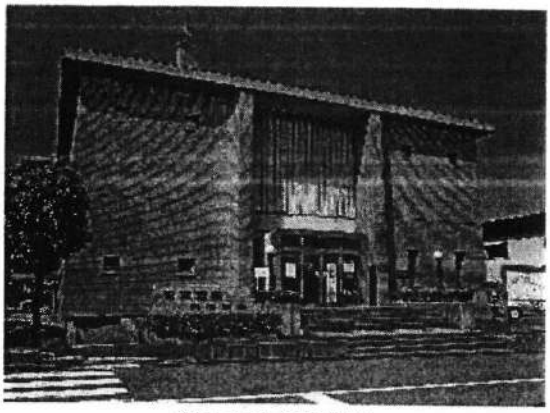
最上川を遡った内陸部に米沢盆地がある。この地域は、古くは置賜郡として陸奥国に属し、出羽国の成立とともに出羽国に属したもので、福島県・宮城県方面との文化的交流も深く、弥生時代中期以降の農耕文化を示す遺跡や横穴式石室をもつ古墳群の存在も知られていた。この盆地の東北方に当たる平野部にある低丘陵を利用して営まれた前方後円墳が稲荷森古墳である。この古墳は昭和８年頃に発見され、最近に至って地形測量により再認識され、昭和５２～５４年にかけて山形県が測量や発掘を行って確認したものである。この古墳は、西南方に向かって連なる小さな低丘陵の一つを利用し、前方部を南々西に向け、後円部の東北方には丘陵が遺存する。この付近は古墳時代中期ころ（南小泉式期等）の集落跡となっている。墳丘は半ばは丘陵を利用し、その上に盛土したものである。
全長は約９６メートル、後円部径６２メートル、高さ約１０メートル、前方部は長さ３４メートル、前方部端幅３２メートル、高さ約５メートルで、後円部は三段築成となっている。後円部に比較し、前方部が短く、また低い特色を示すが、全体として墳形を良く残しているものである。調査により葺石の一部や後円部築成前に破砕された土師器の脚部が検出されている。またくびれ部は中世に土＝(*1)墓として利用されたこともあり、陶器片や人骨等も検出されている。出土土器や大規模化した古墳の形態から５世紀代に属するものと考えられている。
この地域は、日本列島全体の古墳の広がりとしては北端に属する地域であるが、このような大型の前方後円墳が築造されていたことは、古墳時代研究上に新しい問題点を提出するものである。加えてこの盆地内で若干数の小規模な前方後円墳も知られつつあり、卓越した規模をもつ稲荷森古墳は、この盆地を基盤としたこの地域の首長墓としてとらえられるものである。古墳時代におけるこの地域と東方あるいは西日本等との政治的関係も示す重要なものであり、今回その保存を図るものである。

酒田市概要（山形県HP等より）

酒田市の歴史は古く平安時代には出羽国府（城輪柵）が置かれたとされ、当時の出羽国の政治的中心で中央との繋がりも強かったと考えられている。延喜式神名帳に記される式内社も山形県内では酒田市を含めた庄内地方に集中し、古代の街道や駅などが設置され文化的に高い地域でもあった。
中世は庄内地方は武藤氏が支配し、酒田市では一族である東禅寺氏が東禅寺城（後の亀ヶ崎城）に入り周辺を統治していたものの、戦国末期になると武藤氏の戦局拡大の失政などもあり家臣団が次々に離反し、東禅寺氏は急先鋒となりそれらをまとめ上げ、また最上氏を後ろ盾にする事で一時飽海郡一帯を掌握した。その後の酒田市は混沌を極め、最上氏と上杉氏が交互に支配し一揆の勃発など世情が不安定な状態が続いた。元和８年（1662）に最上家が改易となり酒井家が１３万８千石で鶴ヶ岡城に入り庄内藩を立藩すると、１国１城令の中酒田市にある亀ヶ崎城だけは例外的に認められ、庄内藩は鶴岡と酒田の両輪で安定した政治が行なわれる事になった。特に酒田市には古くから奥州藤原氏の家臣３６人の子孫と呼ばれる「酒田三十六人衆」が自治組織を作り上げ、中には鐙屋や本間家といった日本有数の豪商が育っていた。寛文１２年（1672）に河村瑞賢が西回り航路を整備すると酒田港は北前船の寄港地になり、最上川舟運の発展に伴って内陸部の米や紅花や青砥といった商品作物も一手に取り扱うようになり飛躍的に繁栄することとなった。戊辰戦争では奥羽越列藩同盟に属し結果的には敗北するが、主戦場が秋田県側で行なわれた為、酒田市では大きな損害を受けず明治時代を迎えることとなった。現在の酒田市には豪商の町屋や料亭、洋風建築、史跡など数多く残り繁栄した当時の様子を今に伝えている。

城輪柵

城輪柵は奈良時代末期に秋田城より移設された出羽国府跡の最有力と見られる古代城柵跡である。総面積は５２万㎡あり一辺が約７２０ｍ四方の方形で、中央に１１５ｍの築地塀で囲まれた政庁があった。政庁には正殿と後殿の間には目隠塀が設けられ、東西には脇殿、附属舎などの施設、南門、東門、西門の３つの門が建てられていた。南門が城輪柵の正門にあたり、外側に東西両方に建物跡が発見され、門から真直ぐに南大路が伸びていたことが発掘にて明らかになっている。西門から直線上で外郭西門跡が見つかり、その他にも外郭内部には井戸や２０棟を越える住居跡などが発見されている。現在は政庁南門、東門、築地塀、目隠塀などが復元され歴史公園として整備されている。又、城輪柵跡は昭和７年に国指定史跡に指定されている。



酒田市考古資料館

酒田の考古資料や歴史、民俗資料、産業・経済・海運・文化、自然・風土に関する資料を広く収集し、その保存をはかりながら、これらを広く展観して文化・学術研究・教育活動の充実の一助とし、心豊かな郷土の発展に寄与することを目的として昭和５３年に設立された施設である。
酒田の歴史や民俗、酒田大火に関する常設展示のほか、年数回開催される企画展で酒田の歴史・民俗・文化などテーマをもって展示を行っている。

本間家旧本邸

本間家の中でも中興の祖と言われた本間光丘は周辺の湿地帯を開拓する事で大規模な新田を手に入れた。その実績がかわれ、藩の事業に参加するようになり、特に安永年間（1772～81年）には、沿岸２０キロに渡る防風林の植栽や港湾の整備、新田開発など多くの事業を手掛けた。又、文化事業にも力を入れ、菩提寺である浄福寺唐門や日枝神社の社殿、泉流寺の徳尼公廟など多くの建物を寄進している。「酒田三十六人衆」にも名を連ね、隣接する多くの大名にも金銭的配慮を行っていました。この明和５年（1768）に建てられた旧本宅も当初は幕府の巡見使宿舎の為に建造し庄内藩酒井家に献上したもので、後に酒井家から拝領される形をとっている。その頃になると本間家は士分として禄や、苗字、帯刀も許され、本宅の建物も桟瓦葺平屋書院造りで武家屋敷と商家建築の混合した形式をとっている。

正面の長屋門は二千石の格式を持っていたとされ、それに続く正玄関は、藩主、県知事、菩提寺の住職にしか使用されなかったようである。家族などは、脇にある棟門から出入りをしていたが、この門も一般的な門と比べても格式の高いものであったもと思われる。庭にある石は北前船で利用（船を安定させるため船底に重石とした）した綿積石を使用したもので全国の様々な所から運ばれてきたそうである。旧本間家本邸は山形県の指定文化財となっている。

旧鐙屋

旧鐙屋（あぶみや）は酒田を代表とする廻船問屋で、江戸時代に井原西鶴によって書かれた『日本永代蔵』には「北の国一番の米の買入れ、惣左衛門といふ名を知らざるはなし」と鐙屋の事を紹介している。酒田では豪商３６人による半自治組織のようなものが存在し、鐙屋を始め本間家などが町政を司り酒田三十六人衆などと呼ばれていた。現在の建物は弘化２年（1845）に、火災後建替えられたもので、切妻妻入り、屋根は石置杉皮葺屋根となっていて、当時の酒田の町屋建築の典型とされている。一般的な町屋は店部分が道路に面している場合が多いが、この建物では道路面には長塀が設えられており、直接内部には入れず、建物左側の木戸門を通ってから玄関へ入りるようになっていた。問屋という商売は特に店を広げる必要がない職種だった事と、塀を持つ事がある種の特権意識の表れであったのではないかと思われる。良く雪国に見られる「こみせ」などのアーケード空間がないのは敷地が広く、店部分が直接隣接する他店舗と離れているからなのかも知れない。又、旧鐙屋の敷地は江戸時代当初に比べると４分の１程度に縮小されているが、最大で表口三十間、裏行六十五間だったとされている。旧鐙屋は国指定史跡となっている。

山居倉庫

山居倉庫は１２棟からなる土蔵の倉庫群で明治２６年（1893）に旧庄内藩酒井家の監修の元、酒田米穀取引所の倉庫として建てられたものである。米を保管するという事で、特に湿気と温度管理に注意が措かれ、屋根は二重に組む事で太陽が直接屋根にあらないようになっており、尚且つ屋根と土蔵の間に空間を設けることによって、そこに風が吹き込み温度の上昇を防ぐ構造となっている。又、倉庫の背後に欅を植える事で、日本海からの強風や西日の直射日光を遮る役目を果し、現在でも４０本程度残っている。山居倉庫の裏手には倉庫建設当時に酒井家が太郎稲荷と禎祥稲荷を勧請し元々鎮座していた山居稲荷神社を合祀し三居稲荷神社と改称し倉庫の鎮守社とし祀られている。現在、山居倉庫の１棟は庄内米歴史資料館として開放されており、正面には小鵜飼船が展示されている。

【山居倉庫　夢の倶楽「芳香亭」】

鶴岡市概要（山形県HP等より）

鶴岡市は中世、武藤氏が築いた城下町である。戦国時代に入ると武藤氏は鶴岡市を含む飽海郡一帯を支配するが、近世大名としての磐石な基盤を築く事が出来ず、家臣達が離合集散を繰り返した為、最上氏、上杉氏の侵攻を受けることとなった。武藤氏は当初、大宝寺城（鶴ヶ岡城）を居城にしてたものの、より堅固の城郭の築城が必須となり大山の地を選んだ。後に上杉家の家臣である本庄氏に従属することとなった。
関ヶ原の戦い後は最上氏が支配し鶴ヶ岡城の改築や城下町の建設を行ったが、元和８年(1622)のお家騒動で改易、その後は酒井氏が１３万８千石（後１４万石、実石は２０万石以上といわれている。）で入封し庄内藩を立藩した。酒井氏は現在の鶴岡市の基礎となる町づくりを行い、江戸時代中期までは安定した藩政を行ってきたが、５代忠寄が老中となり日光東照宮（栃木県日光市）の修繕をまかせられるなど出費がかさみ財政が逼迫することとなった。庄内藩は酒田の本間光丘に藩財政立て直しを委任することで改革を断行し再び藩政は安定するが、天保１１年（1840）庄内藩の酒井氏を越後長岡へ、長岡藩の牧野氏を川越へ、川越藩の松平氏を庄内へという三方領地替えが持ち上がった際、庄内藩の領民が江戸に出向き出向き幕府に領地替え取り下げを直訴するという前代未聞の事件が起こり、幕府は命令を取り下げ領民達を賞賛したと伝えられてる。
戊辰戦争の際は白石城（宮城県白石市）で調印された奥羽越列藩同盟に名を連ね、最期まで政府軍と戦ったが敗北し、鶴ヶ岡城は廃城となり施設等は破棄されることとなった。現在の鶴岡市には古い町並みはあまり見られないが、酒井氏縁の社寺仏閣や、藩校である致道館、旧西田川郡役所、旧鶴岡警察署、鶴岡カトリック教会天主堂、大宝館などの洋風建築を数多く見ることができる。

博物館のある鶴岡市中心部一帯は旧庄内藩の藩庁が置かれた鶴ヶ岡城三の丸跡地であり、かつては藩主の御用屋敷があった場所であり、旧藩主家当主酒井忠良が土地建物を所有していた。
昭和２５年（1950年）、酒井から土地建物及び文化財等を寄付され財団法人以文会が設立され、その後、昭和２７年（1952年）に財団法人以文会立致道博物館、昭和３２年（1957年）に財団法人致道博物館と改称されて現在に至っている。現在は、御隠殿と呼ばれる藩主の隠居所の一部と酒井氏庭園に加え、広大な敷地を利用して旧西田川郡役所、旧鶴岡警察署庁舎、旧渋谷家住宅が移築され、さらに収蔵庫・民具の蔵がそれぞれ独立して配置されている。庄内藩校致道館の資料、書院造の庭園、民具など、重要有形民俗文化財8種5,350点を収蔵・展示している。

庄内藩主御隠殿

御隠殿（ごいんでん）は文久3年（1863年）に庄内藩江戸柳原および下谷の御殿を解体・移築したもので、致仕・帰郷した九代藩主酒井忠発が隠居所とした。現在は玄関と奥の座敷（関雎堂）が残り、関雎堂からは酒井氏庭園（後述）を望むことができる。致道館の文物や酒井氏ゆかりの文化財（庄内竿など）を展示。関雎堂から続く茶室・三餘室（さんよしつ）は、後述する松ヶ岡開墾にあたった菅実秀（臥牛と号す）の庵。

酒井氏庭園

敷地一帯は鶴ヶ岡城の三の丸にあたりる。
１６２２（元和８）年三代忠勝が入部、その時からこの地を、御用屋敷とした。作庭年代は不詳ではあるが、東北地方にはまれに見る典型的な書院庭園として貴重であるといわれている。
池を隔て築山の正面中腹に石を立て庭景の中心とし、左手には枯滝を組み、その一帯に峡谷の風景をつくり、その下には荒磯風につくっていいる。右手には亀頭形の名石の出島をもうけ、奥深い入り江をつくり静かなおもむきをみせている。もとは右手築山の後ろに遠く鳥海山を借景としてとりいれたといわれており、１９７１（昭和４６）年大修復をおこない、１９７６年国の名勝に指定された。

旧西田川郡役所

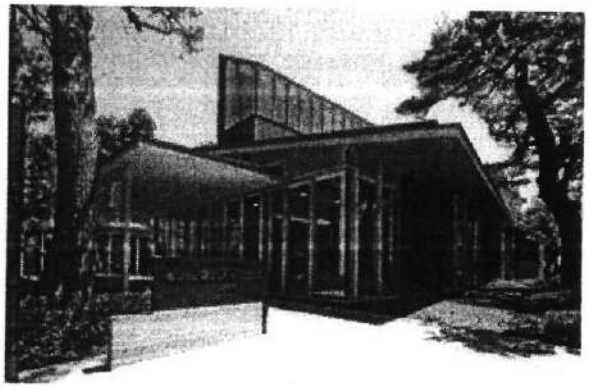
明治１４年（１８８１）初代県令三島通庸の命により鶴岡の大工棟梁高橋兼吉と石井竹次郎の設計により建てられた木造二階・両翼一階建、二階屋根上に時計台を有する洋風建築である。同年明治天皇が東北御巡幸のおりは行在所となった建物でもある。昭和47年（1972年）に当地へ移築。国の重要文化財に指定された。
ここには大昔の人々の生活を考えるための考古学資料に明治維新の時最後まで官軍に抗戦した庄内藩の戊辰戦争資料、降伏後公明正大な処置を行った西郷隆盛との深い交わりを示す関係資料。また二階には「明治文化資料」、ドイツ留学した旧藩主忠篤・忠宝の資料が展示されている。

旧鶴岡警察署庁舎

旧鶴岡警察署庁舎は、大工棟梁・高橋兼吉の設計になる木造二階・入母屋造の建造物であり、欧化政策が積極的に進められた山形県の擬洋風建築を代表する建物の一つである。の明治17年（1884年）竣工、昭和32年（1957年）に当地へ移築され。平成21年（2009年）に国の重要文化財に指定された。外部窓廻りなどはルネッサンス様式を模してはいるものの、屋根の大棟、破風妻飾りなど在来様式をも巧みにとりいれ、和風と洋風とを巧みに融合させており、明治前期に各地の工匠によって建設された擬洋風建築の一つの到達点を示すものとして価値が高いと言われている。桁行18．2m　梁間12．9m　木造2階建、宝形造り、2階正面中央にはベランダを突出して設けている。

田麦俣の多層民家

湯殿山麓の山村、鶴岡市（旧朝日村）田麦俣より移築保存した民家である。県内でも有数の豪雪地帯にあったこの民家は、多層民家と呼ばれており、狭い山峡の敷地と深い雪の生活に適応して三層四層に空間を求めているつくりである。そのため二階三階そして屋根裏部屋までも養蚕などの作業場や収納場として有効な利用を図っている。田麦俣は湯殿山登拝の道者宿や先達をつとめたり、山登りの強力などを生業とする人が多くいたが、明治以降は三山参りの減少など街道集落的な性格が薄れ、田畑の耕作と山仕事のかたわら、養蚕を生業とするようになった。民家の改造改築により、本来寄棟屋根であった民家は、妻側の屋根を大きく開き、通風と採光を目的とした高ハッポウとよばれる高窓をとりつけた結果、カブト造りといわれる均整のとれた美しい茅葺き屋根となった。大黒柱のほぞに記された墨書から１８２２（文政５）年に創建されたことが判っている。



藤沢周平記念館

日本を代表する時代小説の名手・藤沢周平の直筆原稿や創作資料を展示し、作品を解説するとともに、愛用品の展示や自宅書斎を再現している。
また、庄内地方をモデルにしたといわれる「海坂藩」や、作品中に垣間見られる鶴岡・庄内の自然や歴史についても紹介しており、館内のサロンでは、藤沢周平の著作や作品に関連する郷土資料などを、ゆっくりと読むこともできるようになっている。

藩校致道館

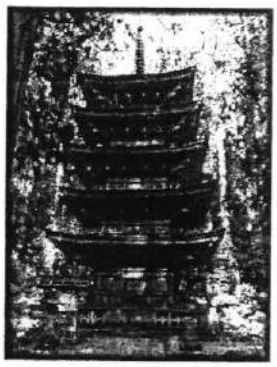
旧致道館は文化２年（1805）に庄内藩九代藩主酒井忠徳が創立した藩校である。人材育成を主目的で徂徠学を主な教学とし年長になると自主学習が中心となった為、後に沈潜の風と呼ばれるような独特な校風をもっていたといわれている。当初は大宝寺にあったものを、文化１３年（1816）に十代藩主酒井忠器が政教一致を図る為、鶴ケ岡城内である現地に移転させ、明治維新後の明治６年（1873）まで続いた。その後、県庁舎や警察署、小学校などに利用され、昭和２６年（1951）に国指定史跡の指定を受けている。現在でも講堂、御入りの間、聖廟、表御門、東御門、西御門などの建物が残っており、藩校としての体裁がここまで残っているのは東北地方では致道館しかないとのことである。又、御入りの間は戊辰戦争で敗北した時、官軍側の参謀である黒田清隆に降伏し、謝罪した場所とされ、歴史的背景としても貴重な存在である。

旧風間家住宅

旧風間家住宅は明治２９年（1896）に旧武家屋敷跡に建てられた豪商建築である。一般の商家建築である町屋とは異なり、正面の道路側には薬医門を初め、母屋、前蔵があり、西側に中蔵、奥蔵、北側に小蔵があるなど広大な敷地に様々な建物が建っている。建物の屋根は杉皮葺石置形式を継承しており、酒田大地震直後の建築だった為、耐震にも十分に考えられ、和風住宅ながら洋風のトラス構造が一部採用されている。風間家は、庄内藩の御用商人として発展し呉服業や太物屋を主な生業とし、明治以降は貸し金業（後の荘内銀行）を営み、本間家に次ぐ大地主となった。平成８年に母屋、平成１２年にその他の建物が国重要文化財に指定されている。

出羽三山神社

出羽三山神社の創建は推古元年（ 593）に蜂子皇子が羽黒大神を勧請した事が始まりとされている。蜂子皇子は羽黒山には寂光寺を開山すると月山、湯殿山と次々に開いて出羽三山修験の祖を築きました。当初、伊?波神社として延喜式神名帳に記載された式内社としても信仰を集め、特に歴代領主だけでなく朝廷や幕府などの中央権力からも崇敬され社領や社殿の造営などが行われた。神仏分離令が発令後は出羽神社と改称し、月山と湯殿山が冬季間豪雪の為、司祭や参拝が困難なことから出羽三山神社の社殿で合祭する形をとっている。現在の社殿は文政元年（1818）に再建されたもので入母屋、茅葺、桁行１３間２尺（24.2m）、梁間９間２尺４寸（17m）、高さ２丈３尺（28m）で三所の神々を合祭している為三神合祭殿と称し、羽黒派古修験道独特な建築様式から合祭殿造りなどと称する場合もある。内々陣は１７年毎の式年造営が続けられ伝統と技術が古来から継承されており、向拝には様々な彫刻が施され、特に蝦虹梁には力士像が鎮座して、秋田県中央から山形県北部に掛けての建築彫刻の特徴が見受けられる。茅葺の建物としては正法寺（岩手県奥州市水沢区）に次ぐ規模を誇り「東三十三ヶ国総鎮護」として威厳と信仰の厚がある。平成１２年に国指定重要文化財に指定。



羽黒山五重塔

羽黒山五重塔の創建は承平年間（ 931～38）に平将門が建立したと伝えられてる。応安年間（1368～75）に再建され、慶長１３年（1608）に最上義光が改修している。塔高：２４m、三間四方、５層、柿葺、素木造で東北地方最古で最も美しい層塔とされます。四方の額は小野道風が書いたものとされ「南：応身、東：法身、西：報身、北：化身」の額が揚げられている。明治初頭に発令された神仏分離令の中、出羽三山神社付近の寺院系の多くの建物が破棄されたが、この五重塔は免れ昭和４１年に国宝に指定。

出羽三山神社参道

蜂子社

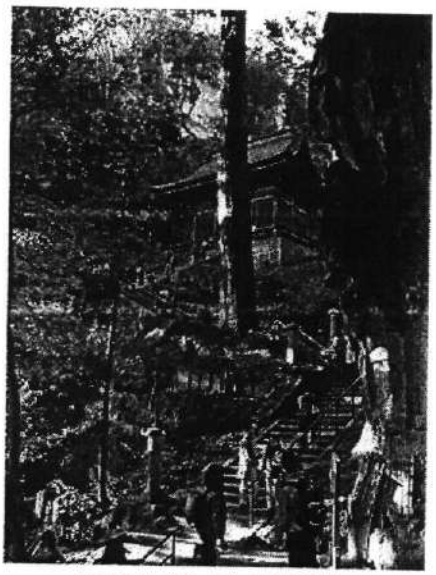
蜂子社は羽黒山修験の開祖である蜂子皇子を祀る神社である。蜂子皇子は崇峻天皇の第三子と生まれたが、当時は蘇我氏の台頭などで朝廷内が不安定（崇峻天皇が蘇我馬子に暗殺されるなど）な状態だった為、推古元年（ 593）に日本海を北上し難を逃れた。皇子が庄内の由良港に上陸した時、一羽の烏（三本足）に導かれ羽黒山に登ったとされ、その後、羽黒大神を勧請し、次いで月山、湯殿山と開山した。

社殿の建立年は不明だが、宝形造り、銅板葺き、三間四方の建物で、組物や彫刻など凝った造りで、花頭窓があるなど寺院建築の特徴を備えている。木鼻には通常、獅子や象、龍であるが、蜂子神社では鳥（烏？）が彫りこまれ、蜂子皇子の由来に縁のあるものにしたと思われる。建物の形態から神社風に改修しているようであるが、元開山堂遺構として大変貴重な存在で、平成１７年に鶴岡市指定有形文化財に指定。蜂子皇子の墓所は出羽三山神社境内にあり現在も宮内庁によって管理されている。

出羽三山神社の参道脇に広がる杉並木は江戸時代初期、羽黒山中興の祖と言われた天宥が植林したものである。植林した杉は樹齢が３００年以上で、幹径が１mを越えるものは１８４本、総数では４４５本あるとされ、随神門から山頂に至るスギ並木は国指定特別天然記念物に指定されている。天宥は参道の整備にも力を入れ石灯籠の設置や須賀の滝の造園なども行なっている。

山形市概要（山形県HP等より）

山形市の歴史は古く、大ノ越古墳や嶋遺跡など古代から支配階層があり中央政府とも繋がりがあった。中世に入ると奥州探題だった斯波氏が山形市周辺に土着し、後に最上氏と名乗り大きな影響力を持つようになる。最上義光の時代に最盛期を迎え、東北の関ヶ原の戦いと言われる出羽合戦で上杉勢の猛攻を耐えたことより山形県全域と秋田県の由利郡、雄勝郡を含む５７万石の大大名となった。義光は平城では日本最大級の広さを持つ山形城の拡張や城下町の建設、新田開発や社寺仏閣の造営など多くの実績を上げ、実石高は１００万石とも２００万石とも言われた領国経営を積極的に行い、中心地だった山形の町づくりは現在の山形市の基礎となるものであった。しかし、その多くは義光一代で急速に行なったものが多く義光が死去すると家督争いが激化し慶長６年（1601）にお家騒動の為改易となった。その後は山形の地が有力外様大名だった伊達氏、佐竹氏、上杉氏と領土が近接していた事もあり徳川家の重臣である鳥居氏が２４万石で山形藩を引き継ぐこととなった。しかし、時勢が安定してくると山形藩の重要性が次第に薄れ、比較的石高の低い大名が短期間で何度も交代するという特異な地域となった。現在の山形市は初代山形藩主だった最上義光縁の鳥海月山両所宮（山形市指定文化財）や専称寺（駒姫菩提寺）、光禅寺（最上家菩提寺-庭園：山形市指定名勝）などの多くの社寺が残され「小京都」にも認定されている。又、山形県初代県令三島通庸は山形市を県都として恥じぬように洋風化政策を断行し、市内には山形県庁舎（国重）や済生館（国重）、山形師範学校（国重）などの洋風建築が点在している。



立石寺(秋の仁王門前)

山形市山寺にある天台宗の寺。山号は宝珠山（ほうじゅさん）。山寺と通称される。本尊は薬師如来。芭蕉が『おくのほそ道』に「閑（しずか）さや岩にしみ入る蝉（せみ）の声」を詠んだ寺として有名である。860年（貞観2）清和天皇勅願により比叡山延暦寺の別院として慈覚大師円仁が創建した。延暦寺根本中堂の法燈を分燈しており、叡山の法燈が織田信長の焼打ちによって消えたとき、立石寺から再建の燈火が移されている。室町末期に兵火により焼失したが、天文年間（1532～55）最上義守、一相坊円海らによって再建中興され、関東以北の霊場として信仰の中心となった。寺伝によると、全盛期の江戸初期には2800石の朱印地を有し、僧房100寺、僧侶300余人を有したという。35万坪（115ヘクタール）の宝珠山全山が境内で、史跡名勝、県立公園とされ、40余の堂塔が散在して深閑の趣ある寺容である。中堂（根本中堂）は1356年（正平11・延文1）山形城主斯波兼頼（しばかねより）が再建建立したもの、本尊の薬師如来坐像は慈覚大師作と伝えられる。また、1144年（天養1）入阿大徳と同法5人が『妙法蓮華経』1部8巻を書写して慈覚大師入定窟の岩頭に納めた天養元年如法経所碑があり、以上いずれも国重要文化財に指定されている。

立石寺・山門

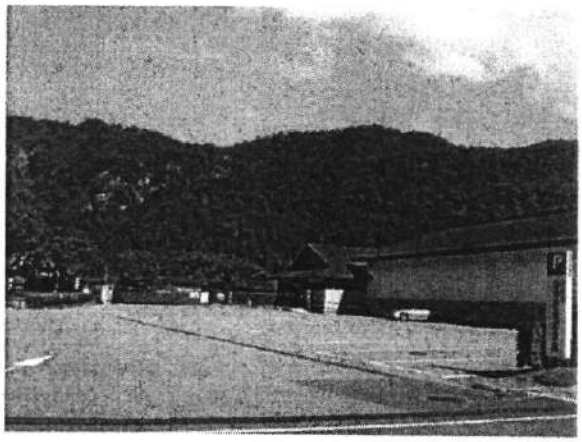
山門は茅葺の趣がある建築物で建立は鎌倉時代と伝えられている。山門を潜ると料金所があり奥之院までは八百余段の石段が続く。

立石寺・三重小塔

三重小塔は永正１６年（1519）に建立された小塔である。高さが８尺２寸（248cm）と比較的小さい為、岩窟の中に全体が納まり隙間を埋めるように木壁と庇が付いている。昭和２７年（1952）に国指定重要文化財に指定されている。

せみ塚

せみ塚は長い石段の参道中腹にあり案内板によると「松尾芭蕉のおくのほそ道の紀行文に、　山形領に立石寺という山寺あり。慈覚大師の開基にして、殊に清閑の地なり。一見すべきよし、人々の勧むるによりて、尾花沢よりとって返し、その間七里ばかりなり。日いまだ暮れず。麓の坊に宿借り置きて、山上の堂に登る。岩に巌を重ねて山とし、松栢年旧り、土石老いて苔滑らかに、岩上の院々扉を閉ぢて物の音聞こえず。岸を巡り、岩を這ひて、仏閣を拝し、佳景寂寞として心澄みゆくのみおぼゆ。　「閑かさや岩にしみ入る蝉の声」　芭蕉翁の句をしたためた短冊をこの地に埋めて、石に塚をたてたもので、せみ塚と呼ばれている。」とある。

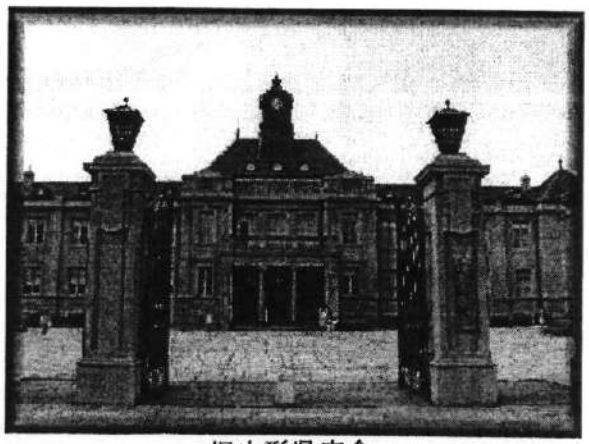


山寺芭蕉記念館

芭蕉が「奥の細道」の旅で山寺を訪れてから三百年目、同時に山形市ができてから百周年を記念して、平成元年に建てられたのが「山寺芭蕉記念館」である。
～芭蕉の偉業と歩みを振り返る、心和やかなひとときを～
芭蕉が「奥の細道」の旅での名句「閑かさや　岩にしみ入る蝉の声」を詠んだ山寺。その立石寺を一望できる地に建ち、絶好のロケーションも魅力の一つである。芭蕉の直筆の書や蕉門（しょうもん）資料などを展示している。また、日本文化をテーマとした企画展も随時開催される。
また記念館では、芭蕉に関する文書や映像などが観賞できる他、研修室や茶室などが利用することができる。

山形城

山形城は延文元年（1356）に最上氏の祖である斯波兼頼が羽州探題としてこの地に赴任し居館を築いたのが始まりとされている。斯波は足利氏の分家にあたる名門で、南北朝時代には南朝側の有力大名として周囲に大きな影響力を持っていた。その後、地名から最上氏と改め義光の時代には周囲一帯の２４万石を領する大名となった。関ヶ原の戦いの際は西軍の上杉勢と戦い、劣勢となっていたが、石田三成が討ち取られ、上杉勢が自領に引き揚げた事で、庄内地方、雄勝地方に兵を進め、５７万石の大大名となる。山形城の整備も進め、三の丸までの広さは２３５万m2という当時の城郭の中では全国第５位という規模である。天守閣は築かれなかったが、本丸には２重櫓が３基、二の丸には三重櫓一基、二重櫓五基、三の丸には城門を１１箇所設けるなど多くの建物があった。最上家が改易となった後は譜代大名である鳥居忠政が磐城平藩（福島県いわき市）から２４万石で入り、伊達氏、佐竹氏、上杉氏などの東国有力大名への抑えとする為、山形城もさらに重要視されるようになる。
その後、時勢が安定した事もあり、山形城の重要性が薄れ、石高の低い大名が赴任するようになり、建物の規模はその都度縮小され、幕末期には水野氏5万石となった時は城を維持するのにかなり苦労したようであった。
明治維新後は廃城となり大手南門が、万松寺山門として移築され、本丸御殿の一部が宝光院の本堂に使用されている。城郭跡は歩兵第３２連隊の兵営地となり、本丸内堀は埋め立てられ、旧状を残してはいない。現在は霞城公園として整備され国指定史跡に指定され日本１００名城に指定されている。



旧山形県庁舎

旧山形県庁舎（国重要文化財）は大正５年（1916）に竣工した近代建築である。煉瓦造３階建て、寄棟、スレート葺で、正面は特に意匠に富んでいて玄関ポーチには丸柱を採用し上下に柱飾りを設え、２階部はバルコニーとなってる。玄関部分は他の外壁面より大きく前に張り出し、屋根もこの部分だけ高く設置され、さらに時計台を設える事でより印象深い建物になっている。又、縦長の窓を採用し、その上下にマグサと窓台をデザイン化し、正面部の柱型を張り出させ建物をより立体的に表現している。平成７年（1995）に改修工事を行い、現在は「文翔館」として一般公開されている。設計は田原新之助、中條精一郎。

旧山形県会議事堂

旧山形県会議事堂（国重要文化財）は大正５年（1916）に竣工した近代建築である。煉瓦造３階建て、寄棟、スレート葺で、正面の赤レンガと石材の灰色のコントラストが非常に印象的な建物である。縦長の窓を採用し、その上下にマグサと窓台をデザイン化し、正面部の柱型を張り出させその部分の仕上げを変えて建物をより立体的に表現しています。又、正面性を得る為、玄関側の屋根には中央と左右両端に塔屋を設け、パラペット部分をレリーフ状にするなど工夫が見受けられる。それ以外の所ではドーマなどを設え、より変化に富んだ屋根にしている。左右両側と背後は赤レンガ主体の仕上げで全体的に質素な印象を受け、正面との対比が良く分かるようになっている。平成７年（1995）に改修工事を行い、現在は旧山形県庁舎と一体として「文翔館」として一般公開されている。設計は田原新之助、中條精一郎。

最上義光歴史館

山形繁栄の基礎を築いた戦国武将最上義光の名を冠した当歴史館は、散逸の危機にある最上家関係の資料を収集、保管、調査研究すると共に、広く一般に公開し、義光公並びに最上家を顕彰する施設として山形市が建設、平成元年12月1日に開館した。開館当時は鉄筋コンクリート造平屋建で、屋根が日本風の切妻造り、建物自体はヨーロッパ風の建築様式が用いられ、前庭との調和を図った建物として建設された。平成4年2月には、収蔵庫、第二展示室、研修室及び喫茶室等を増設し、現在の鉄筋コンクリート造平屋建一部二階建が完成した。
当歴史館の敷地は、最上家初代斯波兼頼公の菩提寺光明寺があった場所である。義光公が整備し、居城とした山形城の二の丸東大手門前の一等地に位置している。現在は、国指定の史跡山形城跡から連なる市街地歴史文化ゾーンの中核として、歴史と文化の情報発信地の役割を果たしている。

旧済生館

旧済生館は県立病院として計画され明治１１年（1878）に竣工した近代建築である。当事山形県令だった三島通庸は近代化政策を押し進め、多くの庁舎や公共建築を洋風建築として建替えさせた。設計、棟梁は原口祐之で洋風のデザインを伝統的技術で模倣している。正面は多角形の搭状の建物で当時としてもかなり印象的な建物で、バージボードと呼ばれる軒先にある飾り付きの破風板やファンライト（半円形の欄間）、下見板張り、バルコニーなど多くの洋風建築の要素が取り入れられている。昭和４１年に現地に移築保存され、国重要文化財にも指定され、郷土資料館として当時の医学医療関係資料や医師アルブレヒト・ローレツ博士の資料などが展示されている。

山形県立博物館

本館は、山形県総合学術調査会によって収集された膨大な資料の保存・展示施設として構想され、明治百年記念事業の一環として建設されて、昭和４６（1971）年４月に開館した。その後、自然学習園と教育資料館（分館）を開設し、地学、植物、動物、考古、歴史、民俗、教育の７部門を擁する総合博物館としての歩みを続けている。

山形県立博物館４０周年記念展
「出羽国成立以前の山形 - 山形と東北大学所蔵重要考古資料 - 」
山形県立博物館開館４０周年を記念し、県民の皆様に山形県のはじまりの姿、縄文時代の繁栄、米どころのはじまり、北の古墳文化など、出羽国成立までのあゆみを考古資料から紹介し、平成２３年新たに国指定重要文化財になった「山形県水木田遺跡出土品」の指定後の初公開を行うものである。出羽国成立以前の山形の姿を全国的な視野から探るために、全国の資料を含む東北大学所蔵資料（含：国指定重要文化財）と代表的な山形県内出土の考古資料を併せて展示しながら、出羽国成立までのあゆみを解説します。

初代山形県令、三島通庸

初代山形県令、三島通庸

三島通庸は、1835年（天保6）薩摩藩の下級武士の長男として生まれる。幕末は精忠組の一員として、寺田屋騒動に連座するなど尊王倒幕運動に参加。戊辰戦争が起こると西郷隆盛に取り立てられ、武器弾薬や兵糧の輸送を受け持ち、補給部隊として活躍する。
戊辰戦争後は、鹿児島都城の地頭に任命され地域振興の事業を行うが、この功績が内務卿・大久保利通に認められ、明治4年に東京府参事として新政府に出仕することになる。
東京府参事では東京銀座煉瓦街建設など、都市改造計画の行政側の実質責任者として活躍する。これらの経験は、後の山形県令時代の事業を達成するのに大きく役立った。
東京府参事から教部省の教部大丞を経て、明治7年に酒田県令として赴任し、明治9年に初代山形県令となる。
三島通庸が山形で過ごしたのは、明治7年から明治15年までの7年間である。この7年間で、山形県庁舎を中心とした都市整備事業や地方郡役所の建築、新道開削や石橋架橋の道路整備事業など、多くの実績を残し山形県の振興に尽力した。

■山形県政に対する志
三島通庸は山形県令に就任する際に、内務卿・大久保利通に県政運営の抱負を次のように述べている。

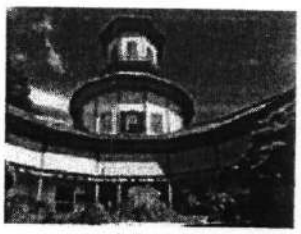
(1)道路を開き、運輸の便利を良くし、民力を養い、県民の目を広く外の世界へ開かせること。
(2)学校をつくり、人材養成に努めること。
(3)勧業、なかんづく製糸器械場を設け、博物館を開いて実物による教育を施すこと。
(4)病院を設立し、県民の健康維持を図るとともに、医学教育もおこなうこと。
(5)警察署とその分署を設置するなど、治安機構の確立を図ること。
(6)河川を改修し、これを運輸の動脈として利用促進すること。
(7)酒田港の改修をおこなうこと。

（幕内満雄著「評伝三島通庸」より）

これらの方針により、各地で新道開削、道路整備、擬洋風建築の建設などが行われた。
いくつかの建築物は、火事や時代の流れの中で消失してしまったが、多くが今なお遺産として残っている。

三島通庸が残した産業遺産

■山形県庁舎を中心とする新市街地の建設
三島通庸は、山形県庁舎を中心とする新市街地の建設を行い、市民に明治の新しい時代の到来を示した。
山形県庁舎を中心として都市計画道路を南側にまっすぐに伸ばし、道路の東側は警察署・師範学校・南山学校、西側には警察本署・南村山郡役所・勧業博物館・製糸場、少し離れて済生館など、県の主要な官署や施設が集中して作られた。
これらの建物は、当時は珍しい西洋風の建築で、市民たちはこれらの出現に驚き、また文明開化の到来を感じて新しい県政に期待を抱いた。
古くからの城下町は、三島通庸により近代的都市へと変貌を遂げ、人々に新しい国家の始まりを認識させた。
多くの建物は明治44年の山形市北大火で焼失してしまい、当時の建物として現在残っているのは、旧済生館本館と旧山形師範学校本館のみである。（現在の旧山形師範学校本館は明治34年に山形市緑町に新築移転したもの。）



旧済生館本館

旧山形師範学校本館

■地方郡役所などの建築（擬洋風建築の建設）
山形県庁舎の新市街地の他にも、多くの各地方の郡役所には西洋風の建築（擬洋風建築）が建てられている。
三島通庸が初めて赴任したのが酒田県であったが、当時の庄内地方は士族の反政府運動が盛んな所で、農民の暴動「ワッパ騒動」などもあり、統治が難しい地域であった。この難しい地域を治めるためには、強力な統治能力とともに、目に見える形での「新時代への期待」が必要であった。城下に突如として建てられた西洋風の建物は、当時の人々を驚かせるとともに、新しい時代への期待を起こさせる狙いがあった。

旧西田川郡役所（鶴岡市）

旧鶴岡警察署庁舎（鶴岡市）

旧西村山郡役所（寒河江市）

旧東村山郡役所（天童市）

■山形県と他県を結ぶ新道開削の事業

三島通庸は、山形県と他県を結ぶ新道の開削事業でも多くの功績を残している。
山形県は周囲を山に囲まれており、隣接する地域との交流の停滞は、産業復興や経済発展を阻害するだけでなく、治安維持の面でも避けなければならないことであった。そこで三島通庸は、政府の方針である東北開発事業の一環として、道路交通網の整備を行った。
「栗子隧道」は福島を通り東京と山形を結ぶ万世大路として、「関山隧道」は山形県と仙台を結ぶ関山新道として、「片洞門」は山形県と新潟県を結ぶ小国新道として開削された。

栗子隧道(米沢市)

関山隧道(東根市)

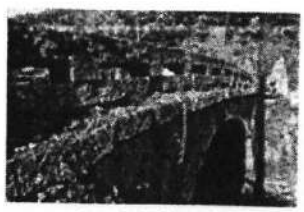
片洞門(小国町)

■山形県内の新道開削と道路整備の事業

三島通庸は、山形県内の新道開削と道路整備も行っており、上記の新道開削を含めた事業は道路23ヶ所、橋65ヶ所にも及ぶ。当時の明治政府にとって、道路交通網の整備は殖産興業と富国強兵、治安維持の観点から急務であった。あまりにも開発を急いだために、強引な道路施設や工事の工夫動員、増税などで庶民の反発を受け「土木県令」や「鬼県令」などと憎まれることもあった。
しかしながら、これらの事業は当時の人々の生活を向上させ、その後の山形県の発展に大きく寄与した。
下記の石橋は、秋田から山形・福島を結ぶ山形の中央幹線道路(現在の国道13号線)に架橋されており、明治天皇は巡行の際に、これらの橋を通って栗子隧道の開通式にのぞまれている。

堅磐橋(上山市)

中山橋(上山市)


吉田橋(南陽市)

■住民の要望による架橋事業

三島通庸は、政府の方針に基づく開発の他にも、地域住民の要望を取り入れた地域開発を行っている。「新橋」や「覗橋」などがその例で、当時の架橋の経費は、基本的には地元住民の負担によるものであったが、住民の嘆願に応じてその不足分を補充した。また架橋の時には、アーチ型石橋の技術的な支援などを行っている。

新橋(上山市)

覗橋(上山市)

文明開化の名棟梁

高橋兼吉（たかはしかねきち）

鶴岡のシンボルをつくった男

明治の文明開化とともに一大建築ブームがわき起こり、日本各地に洋風建築が出現した。その景観・演出は多彩を極め、衆目を集めたという。そして、ここ鶴岡でも、旧西田川郡役所や旧鶴岡警察署など、現在でも観光の名所となり、鶴岡のシンボルともなっている洋風建築がある。これらの産みの親が、高橋兼吉。文明開化という時代の変革期に生き、和洋折衷の洋風建築による優れた建物を数多く残した職人の腕が、今再び見直されようとしている。

旧鶴岡警察署庁舎

旧西田川郡役所

お抱え棟梁・高橋兼吉登場

鶴岡公園で、熱心に写生している子供たち。その絵の中には赤い屋根が印象的な大宝館や、威風堂々とした旧西田川郡役所がよく登場します。ひょっとしたら、あなたも子供のころ写生した記憶があるのではないでしょうか？　ほかにも、鶴岡公園の周辺には、旧鶴岡警察署や、赤い八角尖塔屋根のカトリック教会など、洋風建築が目白押しです。これら鶴岡を象徴するような西洋風の建築は、すべて地元の工匠たちによって建てられました。その代表的な棟梁こそ高橋兼吉です。

兼吉は弘化２年（1845）、大工町（現陽光町）の大工職人、半右衛門の次男として生まれました。父について大工仕事を習ったのち、余語與兵衛の弟子となり修業を重ねました。その後横浜に出た兼吉は佐野友次郎につき洋風建築の工法を学び、帰郷しました。

明治8年、兼吉が30歳のときに羽黒町松ヶ岡の蚕室の設計、施工に携わりました。その後酒井家のお抱え棟梁、小林清右衛門の後継者として抜てきされました。このことは、鶴岡の第一人者として公認されたことを意味するものでした。ここから、彼の華々しい活躍が始まります。

文明開化と洋風建築

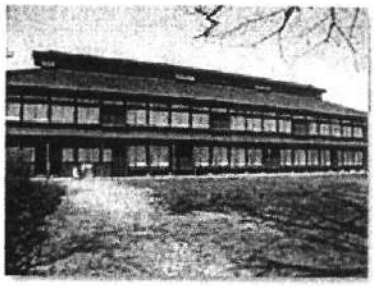
鶴岡初の洋風建築は、明治９年の朝暘学校でした。「大きな図体のふてぶてしい印象の建物で、擬洋風小学校としては、（中略）日本最大の規模を誇った。」（藤森照信著、岩波新書「日本の近代建築」から）といいます。

この建物には、兼吉が直接建てたという記録は残っていませんが、その建設に深く関与していたものと言われています。この朝暘学校を見た当時の人はさぞやその異様な姿にびっくりしたことでしょう。

兼吉が洋風建築に本格的に取り組んだのは、明治13年の西田川郡役所。36歳の時でした。これは時計塔のあるルネッサンス風の建物で、入母屋屋根の１階から最上部の時計塔までだんだんと積み重なっていくその形は、強烈に“天守閣”をイメージさせる建物となっています。完成は翌年５月となりましたが、折しも、この年の９月、明治天皇の東北御巡幸があり、その行在所（御宿舎）となったため、完成からわずか４か月足らずで改築を行っています。

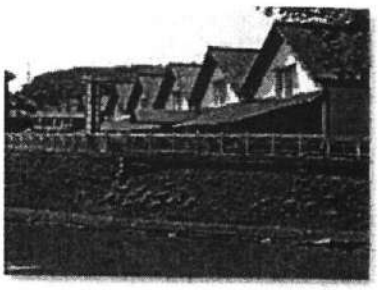
▲西田川郡役所の２階から塔に登るつり階段。下から支える柱がなく、まるで天守閣に登る細い階段のよう。

また明治17年には、旧鶴岡警察署庁舎も完成しました。車寄せにバルコニー、白いペンキ塗りの板張りの外壁という洋風と、それに対して一階が入母屋の屋根、２階屋根には鬼瓦と鶴の絵模様の飾りという和風が無理なく調和して、大変美しい建物となっています。その他にも兼吉が携わったとされる建物は、清川学校、鶴岡裁判所、東田川郡役所、西田川郡医事講究所、大山尋常小学校、鶴岡町役場、山居倉庫などがあり、庄内を代表する棟梁として腕を発揮しました。



松ヶ岡蚕室（鶴岡市）

旧東田川郡役所（鶴岡市）



山居倉庫（酒田市）

一方で兼吉は宮大工として神社仏閣の建設にも取り組んでいます。明治10年の荘内神社、明治15年の湯田川由豆佐売神社、そして晩年は善宝寺の五重の塔に情熱を傾けていきました。
また娘婿として巌太郎を迎え、西田川郡役所以降の建築は、二人の共同で行われたと言われています。そして兼吉のライフワークとなったのは、意外なことに洋風建築ではなく、善宝寺五重塔の建築でした。この建築に明治18年から９年間と、最も長い時間を費やしています。しかし、残念なことに、まるで五重塔の竣工を見届けるかのように、完成の翌年、明治27年に逝去することになるのです。50歳の生涯でした。

荘内神社

由豆佐売神社

善宝寺五重塔

鶴岡は洋風建築の宝庫

しかし鶴岡には、なぜこれほどまで多くの洋風建築があるのでしょうか。

これらの建物を建てるよう指示したのは当時の県令（県知事）三島通庸でした。

三島は、戊辰戦争で最後まで抵抗し、いまだ明治新政府に対して反対の空気が漂う、この地域の政治的安定を図るために派遣された県令でした。そのため、三島はまず殖産興業と文明開化という２つの政策を打ち出します。
殖産興業の一つが交通体系の整備で、山形県と周囲の秋田、宮城、福島をつなぐ新しい道路を開きます。また新しい産業の育成にも努め、農業試験場や、農機具の改良、西洋野菜の栽培を始めます。山形のサクランボは三島が自ら苗木を取り寄せたと言われています。
さらに文明開化政策は、鶴岡での朝暘学校に続いて各地で学校、病院、県庁、郡役所、警察など、新しい機能の建物を洋風建築で造ることを通して行われました。
三島は、洋風建築という手法を通して、新しい時代が来たことを誰の目にも明らかな形で示そうとしたのです。

ベンガラ色の瓦の秘密

兼吉が携わった松ケ岡の蚕室や西洋建築の多くには、鶴岡城の瓦が再利用されています。高橋兼吉を研究している鎌田悌治さんは「瓦は当時とても貴重な物だったんです。刀を差した侍が、わざわざ瓦を２～３枚ずつ担いで行ったという記録が松ケ岡に残されています」と語ります。
そしてさらに、鎌田さんは「兼吉は江戸時代の瓦で、明治の建物を建てた。確かにお金を節約するという面もあったと思いますが、兼吉は江戸の材料を再利用して、不似合いでなく、洋風建築を建てた。これは素晴らしいことだと思います。また白い洋風と赤錆色が似合いますよね。兼吉は瓦を再利用することで、物を大切にする心を現代に伝えていると思います」と語ります。
そして鶴岡城に使われていた「赤瓦」の色は、釉薬に入っている錆びた鉄の色。一方、よく見かける黒瓦は、大正時代になってからのもので、それ以前はすべて赤瓦でした。その赤瓦を焼くためには、鉄をも溶かす1200度という高温で焼かなくてはなりません。これほどの高温を出すためには、赤松でつくった上等の薪でないとダメだそうです。そのため、当然瓦は大変な貴重品となっていました。

建物は人がつくる

「兼吉はあまり多くの大工道具は持たなかったそうですよ。大工の棟梁と、今でいう設計者とを兼ねていたんだと思います」と鎌田さん。
兼吉は当時の大工としては珍しく、必ず設計図を書いてから仕事に取りかかったそうです。
致道博物館に残された彼の製図道具は、そのことを象徴しているようです。
また兼吉は豪放磊落な人物だったそうです。善宝寺五重塔の建築にあたって、他の棟梁と奈良、京都に出かけたとき、道中、山賊が現れたが、これを兼吉が谷に投げ飛ばした、という豪快な逸話も残っています。

その反面、彼が残した建築は繊細です。繊細でありながら、屋根の妻飾りのように、強烈に個性を主張するような独自の装飾を施しています。

「建物は人がつくる」

これが兼吉の口癖だったそうです。建てられたものには、建てる人間の思いや考え方が自然とにじみ出てくるということでしょうか。

旧鶴岡警察署の妻飾り。鶴の飾りが美しい。

今も伝わる物作りの心意気

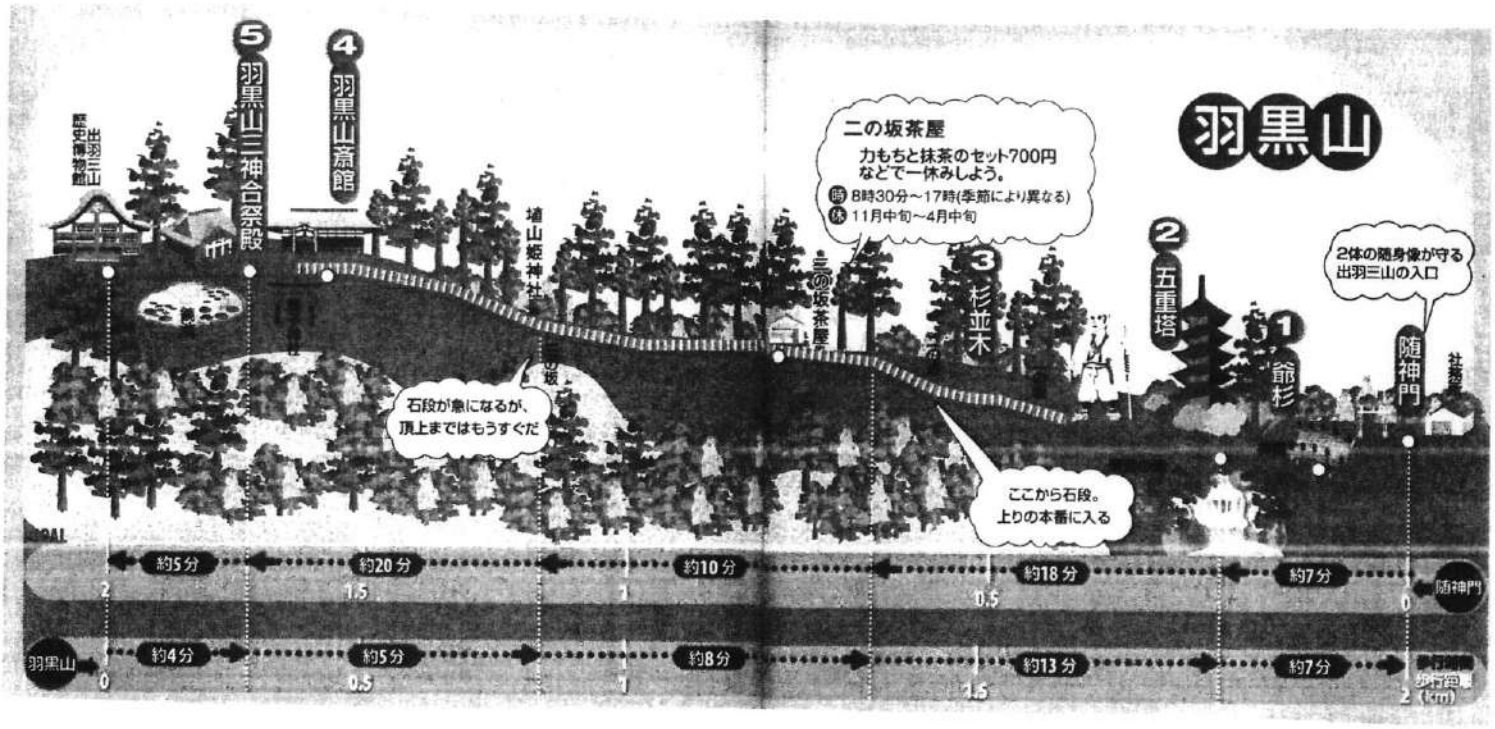
この競技大会は、全国の予選を勝ち抜いてきた若手大工79人が、「四方転び踏み台」という課題に挑み、ミクロ単位の正確さを競う競技です。伊藤さんの腕の確かさが全国トップレベルであることが証明された結果となりました。
伊藤さんを送り出した田川建労執行委員長の斎藤眞佐記さんは「若手大工の技能を競うこの大会には、６年ほど前から選手を送り出していますが、３年ほど前から、ようやく入賞するようになってきました。今度の銅賞で、庄内の大工の腕が確かなものだと証明されました。昔から『温海大工』に『大山左官』と言われて、その腕の良さは、広く知られているところです。今後も若手育成に励みたいです」と語ってくれました。
大工さんの卵を育てる、鶴岡高等職業訓練校も一時期、生徒数が少ない時代がありましたが、今は毎年25人くらいは集まって、県内一の規模になっているそうです。
斎藤さんは、「会社勤めをやめて、手に職をつけようとしてやってくる若い人が増えてきていますね。最近は、プレハブや輸入住宅が増えてきたたんで、大工の腕を見せる仕事が減ってきたんです。昔の大工は『口は下手だども、腕は確かだ』 で通用したもんですが、これからは腕をさらに磨いて、さらに在来工法の良さ、木の家の良さを宣伝しなくては…」と語ります。

明治維新という大変革期に、自分の腕を信じて、見たこともないような西洋風の建物を、見事なまでに作り上げた棟梁たち。一方、戦後最大の変革期とも言われる予測不能の時代、若い人の間にも手に確かな職をつけることが、見直されてきています。確かな物をつくる伝統が続く限り、どんな時代の変化がきても鶴岡は乗り越えていくことができるでしょう。

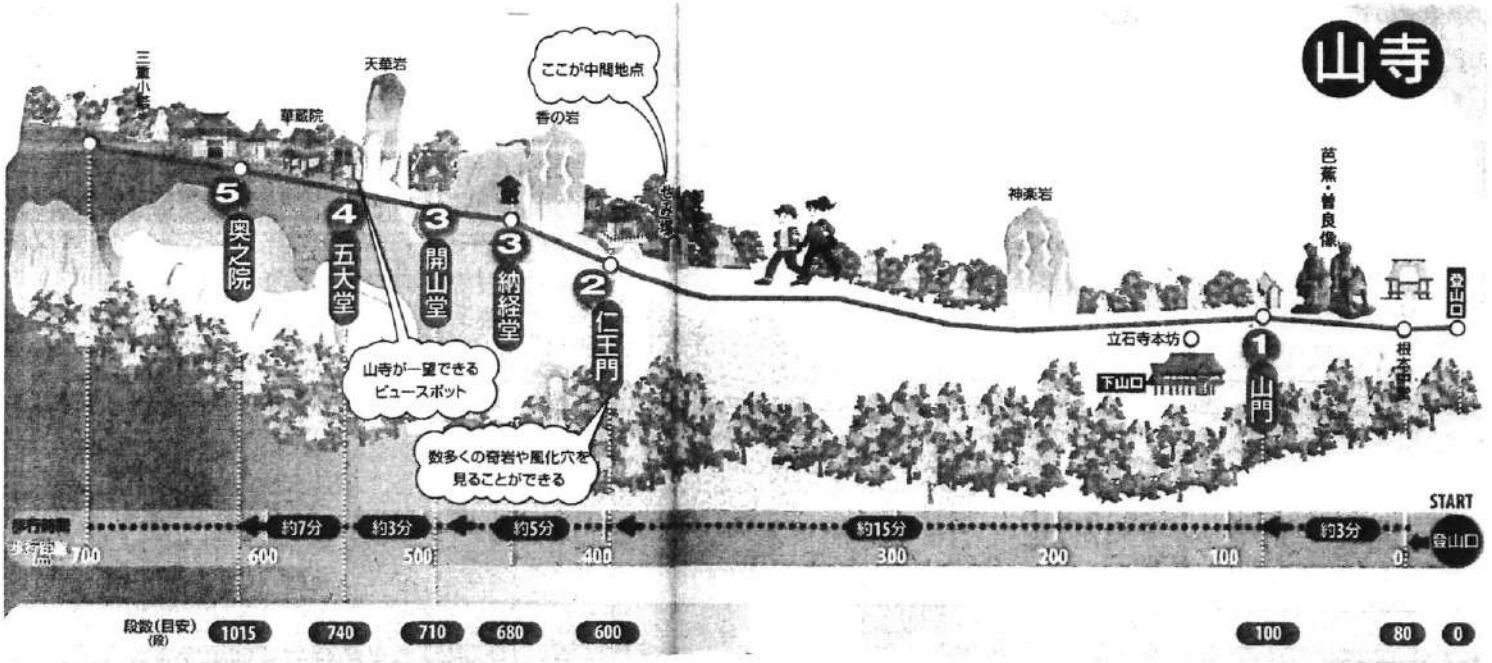
（旧鶴岡市広報 平成11年１月１日号からの転載）

Let’s Walk

羽黒山



山寺



無理はせずに頑張りましょう！

まほろば会秋の見学旅行資料

高川幹事説明用資料

平成２３年１１月１１日（金）～１３日（日）

現存する旧高畠駅舎（昭和19年に完成）
地元の高畠町で利用している

鉄道遺産　いま・むかし㉘

整備された廃線跡をたどって、かつての高畠駅へ

高畠鉄道

●山形県東置賜郡高畠町

旧高畠駅の近く、国道113号と交わるあたりにある「まほろばの緑道」の案内板

現在は山形新幹線も停車する奥羽本線の高畠駅が開業したのは明治33年（1900）のことで、開業時の駅名は「糠ノ目」。当時の奥羽本線はまだ全通前で、駅は小さなものであった。

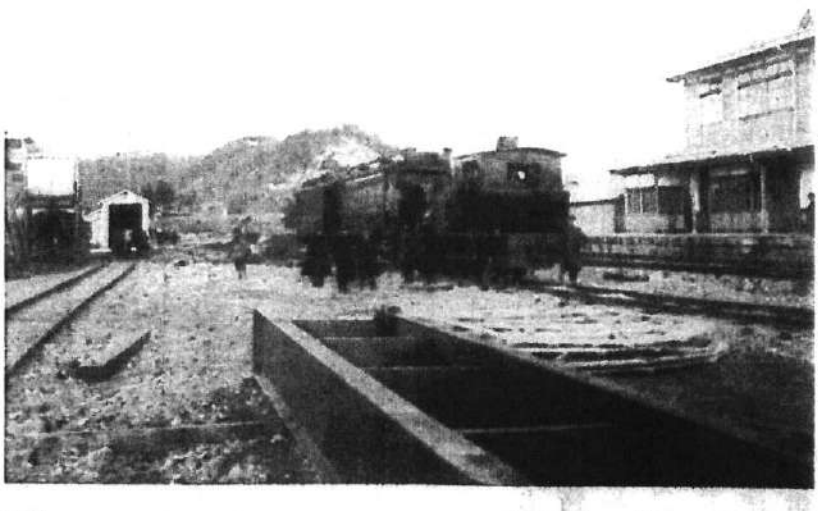
大正11年（1922）、ここを起点として当時の高畠駅までを結ぶ地方私鉄「高畠鉄道」が開業する。高畠町は古くから生糸の産地として知られ、二井宿峠を越えて宮城県白石へと延びる七ケ宿街道に沿った町としても栄えていたが、奥羽本線は町の中心から離れた場所を通っており、鉄道建設は町民の悲願となっていたのである。

高畠鉄道は大正13年に路線を二井宿まで延ばし、昭和4年に全線の電化を完成。同18年には合併によって名称を「山形交通高畠線」へと変えた。廃止は昭和49年。自動車の普及による利用者減少のためであった。

その後、線路が撤去された軌道敷が再整備され、昭和57年に「まほろばの緑道」という名の遊歩道として生まれ変わった。このネーミングは、山形の歌人、結城哀草果がこの地方を「置賜は国のまほろば菜種咲き若葉茂りて雪山も見ゆ」と歌ったことにちなんだもの。糠ノ目駅（平成3年に高畠駅に改称）と旧高畠駅を結ぶ約6キロの道沿いにはさまざまな植物が植えられ、季節感に溢れた風情は、「まほろば＝周囲が山々に囲まれた平地で、実り豊かな住みよい所」の名にふさわしい。

糠ノ目駅から旧高畠駅に向かって2駅目の竹の森駅は現在公園となっているが、ホーム跡が見てとれる。そして高畠町役場の近くには、旧高畠駅舎が美しい姿をとどめている。石造2階建ての建物には風格が備わり、ここに山形交通の本社が置かれた時代が偲ばれる。かつて線路があった一角には、車両3両が保存展示されており、駅舎との美しい対比を見せている。

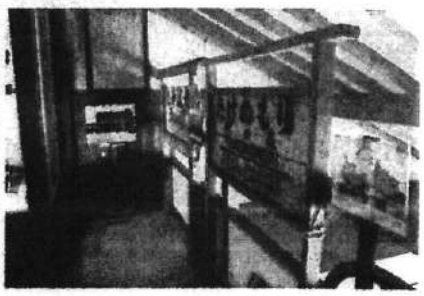
まほろばの緑道は、旧高畠駅以東では軌道敷から徐々



開通直後の旧高畠駅
当時の駅舎（画面右端）は石造でなく、まだ木造だったことが分かる（写真協力／高畠町郷土資料館）

現在の山形新幹線高畠駅。構内の総合観光案内所ではレンタサイクル（3時間500円）が借りられる

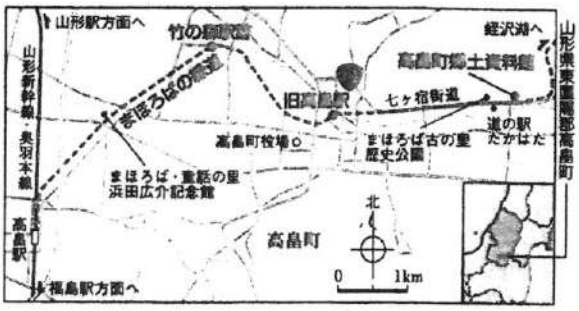
まほろばの緑道の途中に残る竹の森駅の跡。花壇が設けられ、公園として生まれ変わった



「高畠町郷土資料館」の高畠鉄道と山形交通高畠線の歴史を紹介するコーナー。駅名標などが展示されている

高畠町郷土資料館がある「まほろば古（いにしえ）の里歴史公園」は、縄文時代の住居が復元されるなど、古代の景観を願みることができる。入園自由

に離れるが、現在は蛭沢湖付近まで延びており、こちらも散策、サイクリングに好適な道として親しまれている。また、旧高畠駅から徒歩約30分のところにある「高畠町郷土資料館」には、高畠鉄道に関する資料が、美しい状態で展示されている。今は鉄道のない山の中の小さな町で、在りし日の鉄道の面影が、大切に守り続けられている。



MEMO

旧高畠駅
山形新幹線高畠駅からタクシー10分。またはレンタサイクル約30分

高畠町郷土資料館
9時30分～16時30分、月曜・祝日と12～3月休。入館料100円。高畠駅からタクシー約15分。またはレンタサイクル約40分。☎0238・52・4523

観光の問い合わせ
高畠町観光協会☎0238・57・3844

ニッスイ
中性脂肪が、気になる方に。
中性脂肪を低下させる作用のある
EPA600mg DHA260mg 配合
イマーク
要冷蔵
○1日1本を目安にお飲みください。○飲みやすい豆乳ベースヨーグルト風味
※1 中性脂肪低下作用には個人差があります。※2 2011年1月時点お客さま総数
お客さま17万人※2
今だけ！お試しセット
100ml×10本（約10日分）
1,050円 しかも送料無料
【通常価格 3,150円 送料別途525円】
2011年9月30日（金）まで 1家族1セット1回限り
ご注文・お問い合わせはコチラから
0120-231-100
受付時間：平日/9:00～21:00土・日・祝日/9:00～18:00
●ご覧になっている「雑誌名」をおっしゃってください。
●大豆、乳アレルギー体質の方は引用をお控えください。●お届けはお申し込み受付後、クール便で10日以内。（一部地域を除く）●お支払いは商品到着後10日以内に郵便・コンビニ振込で。●返品・交換は未開封に限り、商品到着後7日以内にご返送ください。（返送料はお客さま負担となります）●これまでにお試しセットをご利用いただいたお客さまにはお届けできませんのでご了承ください。●日本水産（株）は、お客様の個人情報を、「海の元気倶楽部」の通販事業における商品の発送、関連するアフターサービス、その他商品、サービスに関するお知らせに使用するほか、商品やサービスの参考とするために個人を特定しない統計情報の形で利用させていただきます。
ニッスイ 海の元気倶楽部
日本水産株式会社 〒100-8686 東京都千代田区大手町2の6の2

平成23年6月16・17日取材　取材／池口英司

稲荷森古墳

いなりもりこふん

日本海側最北の前方後円墳

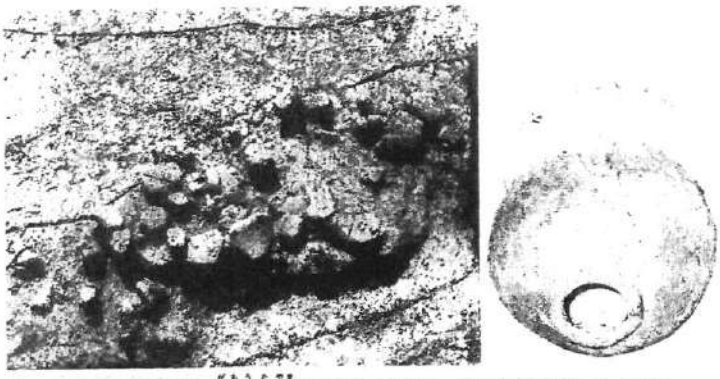
南陽市の稲荷森古墳は、米沢盆地の北部に位置しています。

全長九六メートルで山形県内では最大です。また、日本海側で最も北にある大型の前方後円墳です。この古墳は前方部が後円部に比べて極端に小さく、空から眺めるとお銚子のような形状をしています。

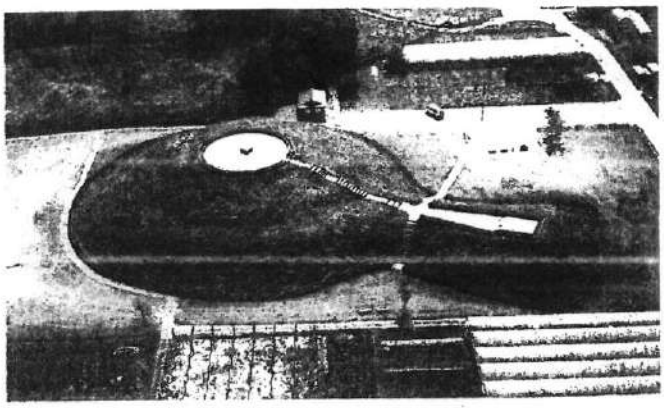
この地域の豪族たちが古墳をつくるようになったのは、古墳時代後期のことと考えられていましたが、昭和五二年（一九七七）に稲荷森古墳が確認され、その形から古墳時代前期にさかのぼる可能性が出てきました。

昭和六二～三年（一九八七～八）に行われた発掘調査では、底部穿孔土師器（意図的に穴を開けてある）という儀式用の土器が出土しました。これらの土器類の形状から、築造年代は古墳時代前期と推定されていて、この地方を支配した首長の墓と考えられます。

現在の稲荷森古墳は史跡公園として整備されており、学習コーナーの古墳広場には、周辺の代表的な古墳の立体模型などが設置されています。



右／底部穿孔土師器（蒲生田山3号墳から出土）。底に穴が開けられている
左／底部穿孔土師器（土器片）の出土状況



史跡整備後の稲荷森古墳

稲荷森古墳

出典: フリー百科事典『ウィキペディア(Wikipedia)』

稲荷森古墳(いなりもりこふん)は、山形県南陽市長岡にある古墳時代前期後半から中期前半に築造されたと推定される前方後円墳。

目次

- 1 概要
- 2 主な出土遺物
- 3 所在地
- 4 交通アクセス
- 5 関連項目
- 6 脚注
- 7 出典・参考文献
- 8 外部リンク

概要

規模は、全長96メートル、後円部直径62メートル、後方部高さ10メートル、前方部長さ34メートル、前方部の幅32メートル、前方部高さ約5メートルで山形県では最大規模を有し、東北では5番目の大きさの前方後円墳である(2008年5月現在)。周壕はめぐらしていない。もともと存在した自然丘を削り出して造られており、後円部が3段築成、前方部が2段築成である。後円部に比べて前方部がやや短い。後円部頂上は平坦で、稲荷の祠(ほこら)がある。

造られた時期は、出土遺物と築造方法などから推定すると、4世紀後半から5世紀初頭と考えられる。これまで置賜地方に古墳が造られたのは古墳時代後期と考えられていたが、本古墳の発掘調査で4世紀代に溯ることが分かり、その後も、米沢市戸塚山古墳、川西町天神森古墳などが発見されている[1]。

1980年(昭和55年)には、国の史跡に指定された(指定地面積、10,182.7平方メートル)。その後の1987年(昭和62年)と1988年(昭和63年)の発掘調査では、被葬者の埋葬施設には石室が存在しないことがわかり、このことから木棺を墳丘内に直接埋葬したもの(木棺直葬)と考えられている。また、高坏形土師器と、底部穿孔土師器という珍しい土器も出土したが、埴輪や葺石等は確認されていない。

宮城県名取市の大塚山古墳や同県色麻町の念南寺古墳、福島県浪江町の堂の森古墳などと計測上同一タイプの古墳であり、これらの古墳との関連性がみてとれる。また、宮城県名取市に所在する東北地方最大の前方後円墳である雷神山古墳を築造した豪族との同盟関係によって造られたものと考えられる[2]。

現在は史跡公園として整備されているが、整備される以前は森林が無秩序に生い茂っており、荒れ放題であった。ただ、近隣の子供達からは「キツネ山」の愛称で呼ばれ、クワガタ虫の取れる山として有名であった。

主な出土遺物

- 高坏形土師器(たかつきがたはじき)
- 底部穿孔土師器(ていぶせんこうはじき)

日向洞窟（国指定遺跡）縄文草創期の土器が発見
場された住居跡。一万年昔の人々の生活を物語る。

日向洞窟は、巨大な擬灰岩塊が露頭する長峯山の麓に所在します。屹立する凝灰岩は、通称「立石」と呼ばれ、遺跡は、西から第Ⅳ岩陰、第Ⅰ洞窟、第Ⅱ洞窟、第Ⅲ岩陰の4カ所の洞窟、岩陰により構成されています。

洞窟が遺跡として認知されたのは昭和29年のことで、翌30年第Ⅰ洞窟の調査が行われました。この調査により出土した土器片が、最古期の縄文土器群として一躍注目され、昭和32年、33年と継続して調査が行われました。昭和45年には、高畠町史編纂の一環として再び調査が実施されています。計4回にわたる調査により、たくさんの遺物が出土しましたが、とりわけ最も下の層から出土した隆起線文土器や爪形文土器等の土器群や、それに伴う石槍、有舌尖頭器、断面三角形錐、植刃、矢柄研磨器、局部磨製石斧、半月形石器等の一連の石器群は、縄文土器の起源に関する問題に新たな一頁を開くとともに、縄文文化の始源、草創期研究に大きく貢献しました。

これらのことを踏まえて、昭和52年2月17日国指定史跡として指定されました。その後、昭和62年から平成元年にかけて、第Ⅰ洞窟から西へ約150メートル離れた地点（西地区）について町教育委員会により調査が行われました。その結果、良好な草創期の遺物包含層が確認され、膨大な量の土器や石器が出土しました。また、石器を製作するときに生じる剥片や砕片の集中が随所に見られ、石器製作跡の様相を呈していました。この西地区の調査により、遺跡が洞窟外の広範囲に広がりを持つことが明らかになっています。

高畠町教育委員会資料より引用

遺跡めぐり編

日向洞窟

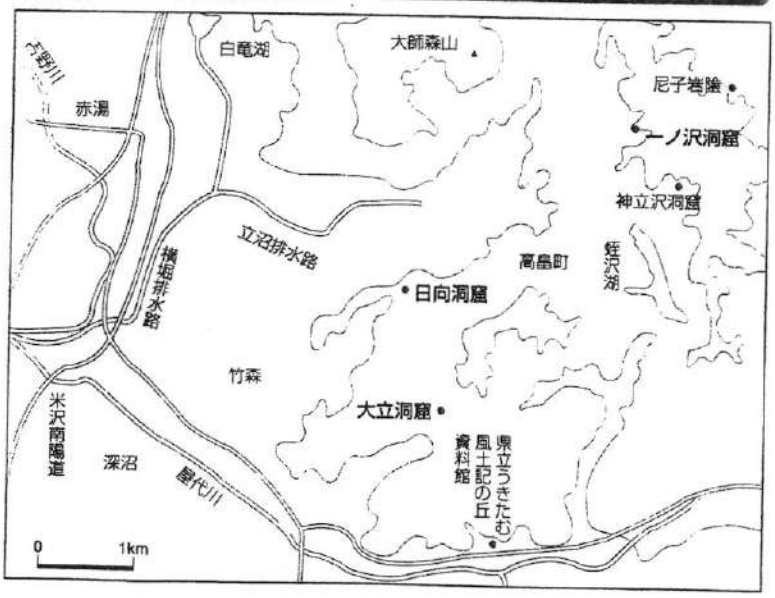
草創期の縄文人の居住洞窟

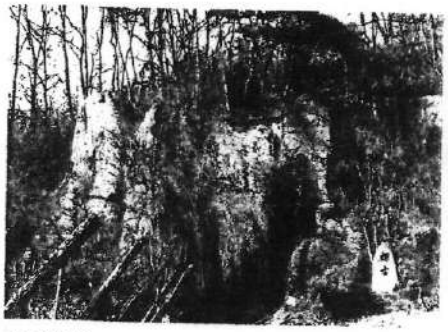
置賜盆地の東端に位置する高畠町近辺では、古くから良質の凝灰岩を産出してきました。この凝灰岩地帯には、洞窟や岩陰が無数にあります。その中のいくつかを、縄文人たちは利用していました。

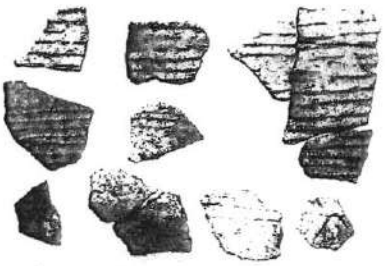
そのうちの一つ、日向洞窟では昭和三〇年（一九五五）の発掘調査によって、縄文時代草創期の土器片が発見されました。出土した土器片には当時の食べ物の一部が付着しているものもあり、貴重な資料となっています。

山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館で、出土した遺物などを見ることができます。また、近隣にある一ノ沢洞窟、大立洞窟も、国指定史跡です。

主な洞窟の分布図




日向洞窟


縄文草創期の土器片。細い線が浮かび上がったような隆起線文土器